

トワイライト氏のとある一日

(井戸の底で醸かまれる物議ぶつぎ 四つの穴に潜む未知への探索と世界の終端)

来客用の、銀色のティースプーン。その最後の一本を草の中からようやく見つけ出し、拾い上げてポケットに仕舞ってから、トワイライトはやれやれとひとり嘆息した。救出完了。行方不明者なし。先にポケットの中で待っていた四本に合流し、小さな匙はちりと微かな音を立てる。

はしゃいだ誰かさんが、その場全員での制止も効かずにあつという間に窓から全部ぶん投げたものを回収しているのである。数が合わないのは砂糖壺に入れていたものまで投げたからだ。御丁寧な話だった。

別に客が帰ってからでもいいのだろうか、驚にでも持つて行かれても癪だ。よって、一段落ついたので見ながら中座してきたのだ。探すのにはそれなりの暇がかかったが、まあ慣れている。

庭——別になにかの境目があるわけでもないが、昔からこのあたりまで自分の家だと認識していた草むらにスプーンたちはばらばらに散らばっていた。なぜ彼女はフォークよりもナイフよりもスプーンを特に好むのだろう。一番憂なふうに顔が映って面白いからだろうか。理由はよく知らない。

庭は広いと言えば広く、森の一部である事を考えればとても狭かった。ときどき彼が草筆りするるので、生えている草は周囲に比べれば短く柔らかいものが多い。たとえ毎日躍りになって引き抜いて回ったとしても、この草たちのすべてを根絶することなど決してできないだろう。だからその程度の生い茂り方で、お互い釣り合いを取って生活している。

背が高く蔓延りやすく邪魔になる草は早めに抜く。花の咲く草は優先的に残す。そんな程度。《森》に間借りする唯一の人間としては、そんな適当さが程良い頃合いなのだった。

ぶらぶらと家の方へと引き返してきた時に。ふと、誰かが庭先に立っているのに気付いた。まばらな草むらには不似合いなぴかぴかの革靴を履いた小さな足が、彼の方へと爪先を向けてじっとしている。

臍は靴を履かない。ならば別な女の子だ。視線を上げれば、そこには見知った顔。等身大の人形でも置いてあるのかと思うような美しい少女が、どこか不機嫌でつまらなそうないつもの無表情で佇んでいるのだった。

彼が近付いてくるまで、相手は動かなかった。ただ冷淡な視線をこちらへ向けているだけだ。美しい顔の中に、大きな翠色の目が宝石のように嵌まり、時折瞬きだけするので生きているとわかる。それさえなければ本当に精巧な作り物に見える極端な容姿の整い方と、着飾り方だった。

今日この娘が身に付けているのはワイン色の長袖ブラウスと、苦いチヨコレートの色をした天鵝絨のスカート。どちらも食べ物の、そして良質な品の色合いをしていた。首元に同じく天鵝絨の、細い黒のリボン。ブラウスには折り目も正しくピントタックが入っている。スカートは胸下から腰までをコルセット状にきつく締め、身体の線を出し、それより下はふわっと膨らむ舞台衣装めいた華やかなものだった。裾からは柔らかかそうな生成りのパニエがす

こしだけ覗いている。それはその長さだけ見えるようにきちんと計算された意匠であるらしく、豪華なレースで飾られて、膝の少し上で行儀良く途切れてわずかに風に揺れていた。

淡い色の赤毛をいつもの二つ結びにして、井戸端で出迎えた時にはちよこんと帽子もかぶっていた。今はそれは部屋の中に置いてきたのだろう。なにも載っていない頭は余計に無防備に見えた。

小さくても声の通る距離までトワイライトが近付いたとき、ようやく相手——イドの娘、忠実な下僕、人間にしか見えない人形、歌う小鳥の小夜啼鳥が口を開いた。

「すこし、話があるの。いいかしら」
「口調はいつも顔と同じく無愛想だ。なにか乱暴に千切って投げするような感じでそんなことを呟いてくる。」

トワイライトはにこつとしてみせて、軽く片手を差し出した。「いいともさ。毎度の事だが、別嬪さんとならこつちからお願いたい話だね。断る道理はねえわな。いつだって二つ返事さ。んで、どうしたの」

言いながらあと数歩近付いて、頃合いを見てこちらも立ち止まる。小夜啼鳥は近寄ってはこなかつたが、すこしだけ爪先を動かした。

そのすらつとした華奢な脚は、肌がごくわずかに透けるようにできて、だが実際には絶妙に不透明の鉄壁を誇る薄さの真っ白いタイツで覆われている。そこにはわずかな染みもほつれも存在しない。服や靴との取り合わせにもよるが、顔を合わせる限り脚はこ

んな感じの純白のタイツを履いている確率が高かつた。

ほっそりといかにも子供じみた、ただこの年頃にのみ特有の、微妙な直線と曲線が描くしなやかな肉体のライン。膨らんだスカートと靴の間。無造作に空間に存在する二本の白い脚は、確かに、妙な説得力というか無防備さと同時に成立する不可侵性というか、なんらかの高次元な美的価値を持っていると思えた。絶妙に可憐かつ潔癖だった。なにやら一言では言えないようななにかがあると思えざるを得ないし、これを見て安直な劣情を抱くような輩は己を恥じて死ねとかつい言いたくなるような、そんな高潔さのある、しかし幼い真つ白な脚。

——断言してもいいが、あの女たぶん白タイツに多大な拘りがある。美的感覚は狂っていないということなのだろうが、拘りすぎてここまで徹底して完璧にやつてのげられると、やはり拗れているというか少女への偏執的な思い入れを煮詰めすぎというか、世の中から相当はみ出た感じの異常性があると判断せざるを得ないと思う。やはり変態だ。そして有罪。

勝手に判決を下しつつ、そんな膝小僧のあたりをなんとなく眺めていると、
「大した話じゃない。でも前置きがあるの。聞く？」

小夜啼鳥がぶつきらばうにまた話しかけてきていた。頷いて先を促す。

「あの人は時々、ふらつと出掛けることがある。私に留守を預けて。なにをしに行くのかは様々だと思っけど、先日はこちらへ来ていた」

「あー、なんか、来るときあるね。いや、いらっしやいますね。俺も決して暇じゃないんだけどね。いや暇じゃないよ。ほんとき。んで？」

彼が少女からなんとなく目を逸らし、頭をがりがり掻いてとぼけるのを小夜啼鳥はじつと無表情に見ていた。

「気まずい。いつも昼まで寝ていて遊んでいるだけの大人だと思われているのだろうか。彼が休業で家にいるときしか顔を合わせられる機会がない以上、また彼女らの来訪の用事が用事である以上、深刻に自堕落な博徒だと思われても言い訳はできなかった。トワイライトはすこし悲しい。」

小夜啼鳥はそんな彼には構うことなく、「いつだって多少は、どこでなにをしているのか気になる。またろくでもないことを仕出かしているんじゃないかってね。でも、考えたって仕方が無いし、わかるはずもないからすぐ気にしないようにするわ。その間にやるべき仕事は色々あるし。普段はそうしてる。私は弁えてる」

感情を見せない、堅苦しい顔でそんなことを言う。しかしふと迷うように長い睫毛を伏せて、「でもたまたま……ふと、思いついたことがあって。あのとき魔が差したというか。つい、試したのよ」

今度は彼女の方が気まずそうに視線を彼から逸らし、小夜啼鳥は言いくげにぼつんぼつんと呟いた。

「水鏡を作ったの……石も使って……そうしたら、思いがけず

うまく行ってしまった。無理だと思ったのに……このあたりの、詳しい説明は省いても構わないわね？」

「もちろん。よろしく頼むぜ」

この娘は魔法使いの弟子だ。なにができてもおかしくない。細かいことは聞いたところで理解できないし意味もないと思ってトワイライトは軽い笑顔で応じた。小夜啼鳥はそっぽを向いたまま、口早に続ける。

「とにかく、あなたたちの様子が見えた。どうせ失敗するはずだと思つたし、見ないつもりだったけど、実際にうまく行ってしまうと……我慢できなくて」

彼女はそこで躊躇った。むつつりと不機嫌に顔をしかめ、俯いて、やがてぼつりと口にする。

「すこし覗き見したの」

「俺なりにしてた？」

とりあえずトワイライトはそれだけ尋ねた。詰問にはならないよう、なるだけ何気ない口調を心がけたからか、小夜啼鳥はふつと顔を上げて彼を見た。そして答える。

「口喧嘩してた。凄いわねあなた。あの人にあれだけあの手この手で食いだされる人なかなかない」

「おー……そうか。なに言つたっけな。あつと、言わなくていいぜ。思い出さなくてもいいくらいさ」

小夜啼鳥へとやんわり右掌を向けて、そんなことを喋りながら頭の中ではさていつどの回のどこを見られたのだろうかと必死

に考えていた。場合によっては色々まずい。

割と本気でトワイライトは言ったのだが、少女は真面目な顔をして言葉を紡ぐ。

「水鏡はとて不安定だったから、すぐ壊れたり、音が聞こえなくなったりしてたわ。だから大したことは……でも見た限りは、終始あなたが物凄い勢いであの人を罵ったり煽ったりするからあの人も相当むきになってて」

「いや売り言葉に買い言葉っていうか……まあ、あるよね。そういうときも。不可抗力というか」

「クソババアって言い過ぎじゃないかしら。回数的にも内容的にも。あとあの食卓と椅子を取った一連の手並み」

どの回だか確定した。一番やばい回だった。落ち着き払ってトワイライトは言った。

「よし。わかった。まずは落ち着こう。それでだなお嬢ちゃん、人を殴る時のコツはな、まず十秒間無心で深呼吸するんだ。そしてそいつのいいところをみつっ思い出してみよう。さあ」

「……殴らないわよ。あなたさういふの全部即興で思い付くの」
「うん、適当言っ生きてる」

小夜啼鳥が呆れたような声を出し、その様子からどうやら殺さずには済みそうだと判断したトワイライトは軽薄に頷いた。

少女が疑わしげな目つきになる。

「あなたはろくでなしの不良だから不用意に近寄ってはいけな」と言われている」

「あのババア……」

「殴ろうかしら」

「多分その辺の木の方が殴り心地いいよ。あの手前から二番目のが特に今旬でオススメな。いや俺は別にいいんだけど、小夜ちゃん的にはきつとそっちの方が楽しいと思うな。予想外の手応えで驚くと思うぜ。絶対予想外。あまりにも意外すぎてここでは言えない。なあだんだんあっちが気になってこない？」

「小夜ちゃんって私のこと？」

にこにこして彼が売り込んだ木には一切興味を示さず、ただ別な箇所につつかかかって少女が訝しげに眉根を寄せた。顔つきそのままの声で聞かれ、トワイライトは気楽に明るく肯定する。

「小夜啼鳥の小夜ちゃん。嫌ならやめます。むしろ様つけたほうがいいですか」

「別に何も思わない。勝手にすればいい」

むすっとしたままどうでもよさそうに吹き、小夜啼鳥は口早に続けた。また目は気まずそうに他所へと逸らして。

「とにかく……覗き見していたのはこっちだし、悪いとは思っているの。だからその間に起きた無礼なことは不問にしようと思ってる。覗き見は失礼なことですよ。先にそういうことをしたのは私よ。不躰なのは認める。だからあなたを制裁する気も、権利もない。あなたは私を咎め立てする？その権利はあるけれど」

不機嫌そうにそこまで喋った小夜啼鳥は、一旦言葉を切つて目を反対側へと動かした。彼の顔は見えないまま、横目に顔をしか

めて押し黙っている。

その様子を見る限り、彼女がそれ以上の含みを残していることはなさそうだった。何度かおよそとんでもなく無礼なことが起きたような気もしなくもなかったが、それについてはなにも見聞きしていないようだ。多少尖った悪口を聞かれた程度なら、なんとでもなる。さらにお咎めもなく許してもらえらるれば**ほんほんさい**万々歳だった。

「小夜ちゃんはいいい子だな。それに免じてお兄さんがいいこと教えてやるうな。そういう黙つてりやわからんことはな、黙つてたらいんだぜ。いちいち正直に言わんでいいの。これ人生でかなり役に立つ豆知識だからな、よく覚えときな」

「……それはあなたも私を不問にするという意味にとつていいの？」

トワイライトがそう言うのと、小夜啼鳥はつと目を上げて疑わしげに彼を見た。その整った小さな顔に笑いかける。

「俺のこと見逃してくれんだろ。お互い様じゃん」

「先に無礼を働いたのは私だけれど。比率が重いんじゃない」

慎重な口ぶりで言う少女はにこりともしない。代わりにこちらが気楽に笑って、

「多分俺の方がそれよか先に喋ってたから気にしなくていいよ。あと別にいいんだけど、念の為に一応言っとくと、比率なら高い低いな。あのバ……ええと、そちらの親分さんがですね、うるさいでしょう。こういった点におかれましては」

「……言い間違えたのよ。知ってるから。たまたまよ」

やんわりトワイライトが誤りを指摘すると、小夜啼鳥はぐつとしかめつ面になり不機嫌に口早に言った。ただし耳が赤い。うんうんと頷いて、トワイライトはあつさり己の無思慮を認めて詫びた。

「そうだよな。わかってるさ。俺も失礼かとは思ってたんだけど、まあ一応な。余計なこととしてごめんな」

「ばちんと手を叩く。」

「はいこれで俺にまた失礼ポイント入ったし、そちらさんの負い目はなくなつたわな。気にせんでいいよ、ほんと」

笑いかけてやると、少女は数秒の間きよんととして、目をばちばちと瞬いた。いかにも小鳥らしい仕草だった。

しばらく翠色の目をまっすぐ彼に向け、小夜啼鳥は黙っていた。気難しく顔をしかめなければ、ぐつと子供っぽく見えた。

「……御母様に言いつける？」

やがて彼女がそう言った時、トワイライトはただ穏やかに尋ね返した。

「なにを？」

「覗き見していたこと」

「なんで？」

「悪いことだから」

「小夜ちゃん、今日覚えること多くて悪いけど、これ大事だからまた覚えときな。小夜ちゃんとあの姐さんとの間だったらな、俺

は迷わず小夜ちゃんの味方だからな。ここすげえ大事だから、メモ取って赤線引いて壁に貼っときな」

ジェスチャー交じりの彼の言葉に、小夜啼鳥は不可解な顔をして眉根を寄せた。

「……なぜ？」

「どうもこうも」

トワイライトは肩をすくめる。少女は納得のいかない様子で咳く。

「そもそもは、あなたはあの女の味方でしょう」

「どれ？」

「あの……頭の……梟みくろ。なんであの女あんなに幼稚なの。私の服に悪戯するのやめさせて」

「ごめん。あれはもう生まれつきああでどうにもならんので許して。俺が精一杯教育してるんだがそれであのレベルでほんとにすまん申し訳ないどうか許して」

遠慮した言葉は、悪いだろうか弱いだろうか足りないだろうか。なんであれたぶんその辺りだ。さすがに彼に面と向かっては言い辛かったか言葉を濁してくれたものの、途中で怒りを思い出したか、きつい声で言ってくる小夜啼鳥にトワイライトは平謝りで頭を下げる。ずばり言われたとしても事実なので返す言葉もないのだが。

梟は今日も散々小夜啼鳥に絡み、嫌がられ逃げられても追いかけて回しては気を惹こうとしつこくしつこく話しかけていた。

元々陽気で人懐ひとまこい性格だが、積極的に遊んでくれる風変わりな客、おまけに小綺麗な若い娘までいるとなると、もう物珍しさで浮かれて手がつけられなくなる。そしてスプーンを投げる。

先程はイドと家の中で和やかに話している様子だったのでまあいいかと女三人で放っておいたのだが、梟は大人より子供が好きなので小夜啼鳥の方により興味を示しているのが常だった。しかし残念ながら小夜啼鳥は梟を好いているようには見えな。そんな空気を読める相手なら誰も苦勞はしないのだが、小夜啼鳥は今のところある理由から暴力を振るったりあからさまな罵倒をしたりはせずに堪こらえている。

ちなみにトワイライトになにかあると梟が機嫌を損ねる可能性も高いので、それを避けねばならない小夜啼鳥からの盾としても機能してくれることになり、彼女が一緒にいるときは彼の安全性も自動的に高まる。殴られないというのは素晴らしい。小夜啼鳥はどんどんストレスを溜める一方だが。追い詰めた挙句に羽はねの自傷癖せでもついて、綺麗な頭にハゲでもできたらどう責任を取ればいいのかと悩まないでもない。

今はそんな厄介者もないということ、少女は感情的な顔になつて不快もあらわに喚わめいた。

「こっそりコルセットの紐をほどくのよ！何度言ってもやめない！背中だから、自分じゃ直せないの！いちいち御母様ママにお願ねがいするか、みっともないままほったらかすかになっちゃうのよ！すぐく嫌なの！迷惑してる！本当にやめてほしい！なんであの女、

結んであるものと見れば全部ほどこいて引つ張ろうとするの。なにかの習性なの。いい加減にしてほしい」

「ごめんごめんごめんよく言つて聞かせる本当にごめん許して」

こちらにしか非はなく、従つてひたすら謝るしかなく、トワイライトとはかく必死で小夜啼鳥を拜み倒して宥めるしかなかつた。

梟は明らかに同輩ないしは年長者ぶつて小夜啼鳥に接しようとするのだが、そのうちどどんとボロが出て幼稚になつていくし、小夜啼鳥は小夜啼鳥で、見た目明らかに歳上でありながら中身は嫉しい幼児レベルという厄介な女に相当手を焼いているようだ。この短気な少女なら、そんな相手は普段なら怒鳴り散らすなり蹴飛ばすなりして追い払うのだろうが、相手はさらにたち悪く一度機嫌を損ねれば矢でも鉄砲でも捻り潰して出鱈目に暴れ倒せる猛禽の化物である。この娘なら（繰り返すがこれは、猛禽でもなんでもなく本来か弱く大人しいはずの小夜啼鳥だ）、それならそれで望むところだと腕捲りして受けて立ちかねないところもあるが、そうなることは避けるとイドから厳命されているらしい。それさえなければもう百回は殺したと、ぐちゃぐちゃに乱された髪を逆立て憎々しげに陰で言われればまあ、冷や汗混じりで苦笑するしかない。こちらとしては。

「子供じゃあるまいし。信じられない。あの女はあなたの恋人ですよ。よくあんなのと付き合つてるわね」

「その点のご想像にお任せします」

へらつと笑つて彼が煙に巻くと、小夜啼鳥はむつと顔をしかめて言い募る。

「でも恋人でしょ。それとも夫婦なの？結婚してるの？でも指輪してない。仕舞つてあるの？なぜつけないの？」

「まあ、想像の余地があるつてこたあいいことだわな。あと小夜ちゃんな、世の中全部の夫婦が指輪してるわけでもねえかんな。結婚式とかもな。夢があつて可愛いけどな」

「夢つてなによ。馬鹿にしてるの」

少女がまた怒り出す前に、トワイライトは軽薄ながらも恭順の意を示してその場を丸く収めた。そんなことをしばらく続けて雑談するうちに、ふと少女が考え深い面持ちで言い出した。

「……誰かが……楽しそうに、大真面目に、なにか非常に難しい話を丁寧にこちらに向けて説明し続けてくれてる間に、その、なぜかだんだん眠くなつたりするのは、やはり失礼なことかしら」

「普通だと思つよ。あと、意味のわからん講義が三時間以上ぶつ通して突つ走るのに付き合わされたら誰でもそうなるから」

彼は気軽に答えたが、小夜啼鳥は納得しかねるようだった。困惑気味に眉をひそめて食い下がる。

「でも相手は楽しそうなのよ。あと、きつと意味のある話なの。難しいだけで。それにそもそも、世間話ではなくちゃんと講義として設けられた時間で……私はその生徒なのよ。それなら、理解できないのは失礼だと思うし、途中で寝たりするのは……やはりあり得ないのではないかしら。お行儀として」

この娘は口が悪いが、その実あまり喋るのが得意ではないとトワイライトはかなり早い段階から見抜いていた。しかし生真面目な顔をしていつも自分なりに色々言葉を選ぼうとしている様子を見ていて好ましい。

「ばれなきやいんじやない。寝てても。寝て起きても話続くと死にたくなるけどな。もっかい寝ようにもうっかり目が冴えてたりすると逃れ得ぬ退屈地獄に落とされるし。俺が一体なにをしたと言いたくなる。これまでに喋りすぎた罰を受けているのかとか真剣に悩んだときあったわ。馬鹿らしい。うっかり反省して悔い改めそうになつたがまだまだ喋るつつの騙されんぞ」

「確かにあなたはよく喋るわ」

小夜啼鳥が呆れたように言うのに軽く手を振って応じ、

「あんがとさん。あー、あと、紙と鉛筆あるとまた別かも。俺の場合、話聞くふりして時々相槌打ちながらこっそりパラパラ漫画描いてたことあるわ。うっかりかなり熱中してたけど、ばれんかつた。ので、オッケー。うん、ありあり」

彼がへらへらして答えると、小夜啼鳥は真剣な顔で聞き返した。

「もしあなたなら、話の途中で相手がうとうとしてたら不愉快に思う？」

「状況によるけど。まあ普通なら、単にああ俺の話退屈だったんだなって思っつて、次回の反省に活かすわな。別に怒らん。あとはまあ、相手にもよるだろうけど、ふむ体調が悪かつたのかなうっ

かり見逃したすぐ休ませようとかも思うかもな。その場合でも別に怒らんのと違う？知らんけど」

「……突然部屋に戻れと言われたのはそういうことなのかしら。それなら……」

なにか得心が行きかけたような表情をしてから、小夜啼鳥は慌てて付け足した。

「仮定の話よ」

そのきゅつと吊り上がった綺麗な眉を眺めて、皮肉でもなんでもなく、ごく優しい気分になってトワイライトも頷いた。

「そうだな。俺もそのつもりで話してるよ」

嫌味ではなく、素直そうに話せたので相手も特に引っかけりはなかつたらしい。その点についてはそれ以上論じること、からかわれたと不快げな様子を見せることもなかつた。ただ真面目な顔をして、念を押して来るだけだ。

「あなたなら不愉快に思わないのね？」

「さつき言つた感じだわな」

「仕事として、真剣に面白い話をしてた途中だとしても」

「俺の話がちゃんと面白くなつてたんなら寝ないだろ。寝られたからにはなにか理由があるんだろ。なら怒る道理はねえわな」

彼があくまでも気楽にそう言つと、少女はようやく納得したように目元の険を弱める。

「……そう」

笑つて頷いて、トワイライトはひとつ提案してみた。

「まあ今度からは、なんか自由に飲めるお茶とか、適当につまめるもんだか、そういう眠気覚まし持ち込ませてくれって言うのもありかもな」

それは既に試していたのかもしれない。なにか苦いものを思い出すふうに、小夜啼鳥は非常に難しそうに顔をしかめた。その頃には、あ、しまったと察しはついていたのだが、なにかフオロ―する前に相手が渋く口を開く。

「……長時間の講義で……お茶を何杯も飲むと、それはそれで、不都合が」

「よし良かった。音の出る時計だ。んで、こまめに忘れず休憩いれてくれって提案しよう。最長五十分で十分な。そんならいが一杯の限度だろ」

そこまで言つて、話の流れから不愉快な勘違いをさせなかったかと心配になったのでトワイライトはそつなく付け足した。

「集中力の」

「なるほど」

少女は真顔でまた納得した様子を見せた。また、その際邪推した己を恥じるような目の色も少し覗かせ、こちらに申し訳なかつたという態度さえ一瞬見せた。やはり失敗した。言い方を考えるべきだった。彼は内心で深く反省した。

人として当然のことだが、女性には不必要な恥をかかせるべきではない。ことにこういった、多感で生真面目そうな年頃の娘には。

なお、どこかにやたらと上背のある女のようなそうでもないよななんだかよくわからない生き物もいた気がするが、あれはもうそういった常識からは除外することになっている。

理由なら様々あった。しかしすくなくとも、人の玄関先でふと下を見て、蟻の巣穴に熔けた鉛を流し込んで掘り出すと物凄く巨大かつ面白い型が取れて絶対に驚くからは非今からそこでやってみないかなどと目を輝かせて言い出すやつは断じて女扱いする必要はないと思う。しかしハイレベルな悪ガキである。たちが悪い。

だが確かに内心では蟻の地下都市の姿に興味を惹かれる悪ガキの自分がいることを良識的大人として黙殺しつつ、

「五十分は適当な。俺の感覚だから拘るなよ。小夜ちゃんのいい具合で、もっと縮めてもいいわな。でも延ばすのはオススメせんぜ。絶対ダレる」

「そう……ね。短い方がいいと、私も思う」

少女の考え深げな面持ちは、明らかに集中力以外の何かについて思いを馳せている気がしたが、そんなことはいくら読み取れたところで勝手に考えてはいけなさとトワイライトは己に命じる。失礼も甚だしかつた。自分はそこまで品性下劣な人間ではない。

あくまでもこちらは集中力について話そうと意識して、

「それ今度提案してみ。絶対、音の出る時計使つてな。話が盛り上がるのと相手さんも時間のこと忘れるだろ。で、そんなときやつこちも指摘しにくい。だが慣れてくりゃあ、決めた時間の区切りの中で、多少はメリハリつけて喋ろうつてなつてくんじゃねえ

かな？知らんけど。まあ、普通はそうならんかねえ……」

ただ相手は普通ではないのが問題なのだ。なにがどう転んで一マス飛んだ斜めに作用するのこまかつたく読めない女について彼が多少考えているうちに、少女は少女で考えを纏めたようだった。軽く頷いて、

「参考になった。あとはこちらで考えるわ。意味のない話なので、あなたは忘れて」

「おつけー。忘れた。なんか小夜ちゃんが可愛らしくピヨピヨ喋ってたなって記憶だけ残しとくわ。思い出の小箱的などっか仕舞っとくな」

澄まして大人びた表情を一転、むっと不機嫌にしかめて小夜啼鳥が呟く。

「……ピヨピヨなんて言ったことない」

深く頷いてにこやかにトワイライトは応じた。

「そっか。じゃあ今言ったのが初のピヨピヨか。ピヨピヨしてたな。かなりピヨピヨ。では貴重な初ピヨを大事に思い出の小箱に仕舞って頭の中によく見えるところに飾るところと。よいしょ」「うるさい！ピヨピヨ……とにかくそれは言つてない！あんた喧嘩売ってんの！馬鹿にしてんじやないわよ！」

見え見えの落とし穴にしっかりと嵌まりかけてから、からかわれたと憤激で真っ赤になった小夜啼鳥が上辺の冷静さなどかなぐり捨ててわめいてきた。そのまま拳を振りかぶり反対の手でがっしと襟首を掴まれたので、素直に謝る。

「すみません調子乗りました殴らないでくださいピヨピヨ」

「忘れろつつってんのよ！言ってる意味わかんないの。馬鹿なの？死にたいわけ？ぶん殴って脳味噌揺らせば物理的に忘れるかしら。そういうの必要なの？どうなのよ！」

「必要ないです、はい」

しばらく無言で見つめ合う。小夜啼鳥はわかりやすい怒りの顔。自分は相変わらず、へらへらしていた。それでも両手を挙げて降参の意を示していたのを汲んでくれたのか、やがてまだ苛立った態度のままだが捻り上げられていた襟元は小さな手の信じられない握力から解放された。

「……次馬鹿にしたら、警告なしで殴るから。覚えておくのね」

「へい」

わかっつてんのかこいつという非常に疑わしい目でもう一度きつくこちらを睨んでから、

「まったたく……こういうくだらなげ揚げ足の取り方が……同系統というか……腹が立つというか……」

苛々と呟いていた小夜啼鳥だったが、そのあたりでふと、なにかに気付いたように動きを止めた。一瞬訝る顔、そして次の瞬間には慌てた顔でがばつと背後へ向き直る。

そこには、梟がいた。いつの間にか寄ってきていたらしい。トワイライトも気付かなかったので、おそらくは魔法で姿を隠して近づいてきたのか。飛んでくると羽ばたきの音でばれるので、たぶん抜き足差し足で歩いてきたらしい。気配まで殺して御苦労な

ことである。こちらはこちらで騒いでいたので接近を見逃した。

梶はわくわくした顔で、小夜啼鳥の背中の編み上げ紐を摘まんでいた。察するにこつそり弛めてどこまで抜き取れるか挑戦していた模様だった。先程苦情を貰った件。現行犯で再現してくれたというわけか。

ぱっと梶の手から飾り紐を取り返し、ついで跳び退つて彼女との距離を取ってから、色々と必死で堪えた感じの声音と口調で小夜啼鳥が話し出す。

「……お菓子を食べたり、舐めたりしたまま……べたべたの手で、私の服や髪を触るのをやめてほしいと……何度も……お願いしているのだけど」

顔つきはもうすこし正直で、こいつ泣くまで殴りたいと見るからに語っていた。だが梶には通じなかった様子でにこにこしている。

「でもお前と遊びたい」

小夜啼鳥は深い深い溜息をついた。その間に必死に怒りを抑えようとして多大な努力を払ったのだろう。なんとかかいつものむつり顔を作って、きつい早口で告げる。

「何度も言ったわ。私は遊んではいけないの。ここへは仕事で来ている。あなたと遊ぶ許可は出ていない。それより、さっき言ったことについてすこしでも考えてくれてるの」

「その紐はきつすぎる。苦しくないか？」

「話を聞いてそれについての返事をして」

噛み合わない会話への苛立ちでほとんど唸るような声を出している小夜啼鳥に、梶はまったくの御機嫌で話しかけた。

「お前本当はどこかのお姫様じゃないのか？小間使いなんて嘘だろ。あれ？ということとは、井戸のは悪い魔女か？お前攫われた子か？助けてやろうか？」

「よし、小夜ちゃんちょっと失礼。後ろ向いて。あとホーホーちょっとこつち来て！」

なにやらとんでもない核心あるいは爆弾を踏み抜きかけた気がしたので、トワイライトはことさらに落着き払って少女二人の間に割り込んだ。

まずは小夜啼鳥の後ろに回り、下から二段目まで弛んで垂れ下がっていた紐を手早く元の形に結び直す。そして梶を小脇に抱えて迷わずその場から駆け出した。

家の裏まで回ってから、気楽な顔で手足をぶらぶらさせていた梶を下ろして向かい合う。真面目な顔をして彼は語りかけた。

「あのな、あの子困ってるから！ちよっかいかけちゃだめだって何度も言ってるだろ。わかるだろ？」

「でも遊びたいんだあ」

説教されても相手は動じなかった。けろっとした顔で見上げてくるだけだ。諦めずトワイライトは続けた。

「仕事で来てるから遊んじゃいけないって言ったの、わかるだろ？ホーホーだって偉い人たちの会合で遊ばないだろ？それと一緒にだよ」

「ああいうとき、私は我慢してる。かなり。真面目なふりをするのはとても……大変というか、飽きるよ。あの子も我慢してるのか？ならかわいそう。遊ばばいいのに」

梟はそう言って、多少考え深げな面持ちで視線を空に彷徨わせた。

癖のない真っ白な髪を長く長く伸ばした、若い女。先入観をすべて取り払って眺めれば、おそらくは十八、九といった歳に見える。しかし表情はまるきり童女どうじょだった。言動からなにか、異様に幼い。

「井戸のが、ダメって言うてるのか？なんで？おかしな話。んー、あれはやはり悪い魔女か？」

きよるきよる忙しなく動く紅玉色ルビィカラーの目をこちらへとまた引き寄せようと努力しながらトワイライトは彼女に言い聞かせる。余所事よそこごとを考えている時に話したところでもなにも頭に残らない。

「何か理由はあるんだろうが、本人も納得してるしいじやないか。身体が弱いとか、服が汚れるとか」

梟は突如ばつと両手を広げて叫ぶ。緋色の衣がつかられて長い袖ひるかえを翻した。

「あいつ強いぞ！小鳥だなんて嘘だ。かなり本気でも私と遊べるはず。服はきつそうだから脱がせてやってるのに怒られるんだ。どうして怒る？」

「小夜啼鳥は小夜啼鳥だ。梟が遊べる相手じゃやない。そのへんのこともあるし、なにかあったら危ないから駄目って言われてるん

だろう。あと服は、何度も言うけど、人の着てるものを勝手に脱がしちゃいけない」

彼がゆっくり話すのを遮るさまたるように梟がかぶりを振って地団駄じだんた踏み、とうとう露骨に駄々をこね出した。

「遊びたいよお遊びたい！友達になりたいのに！」

「友達になりたかったらまず、相手の嫌がることはしないことだよ。あの子はかなり迷惑してる。あまりひどいと、怒って帰ってしまうかも。遊びたいなら、悪戯はもうやっちゃ駄目だ。わかるだろ？」

「遊びたい!!」

叫び返す梟。普段は大体八歳くらいの頭はあるのではと思うのだが、こうなってくるとレベルはさらに大胆に半分下がる。つまりは四歳児である。トワイライトは辛抱強く言い聞かせた。

「あとで俺と遊ぼう。あの人たち帰ってから好きなことして遊んでやるから。な」

「あいつと遊びたいんだ！帰る前に遊びたい！遊びたいのに！」

梟は取り合わず喚おびき散らしている。トワイライトはそれを見下ろして、ゆっくり言った。

「そうか。どうしても小夜啼鳥と遊びたいの？何が何でも？俺があとで遊んでやるって言っても？納得いかないんだな？」

梟はぶすつと膨れて、頷く。

「うん」

トワイライトは深く溜息をつき、目を閉じて悲しげに言った。

「じゃあ、俺はもうお役御免か。俺とはもう遊ばなくていいんだね。そうか、残念だよ。悲しいけど、ホーホーがそう言うんなら仕方ないね。そうか」

途端に梟が血相を変えた。

「ち、ちがう！」

「違うの？」

「ちがう。そんなこと言っていない。言っていないから」

髪と同じくらい白い、人間ではあり得ない真っ白い肌を更に蒼褪めさせて、梟はほとんど涙目になった。おろおろして、

「小夜啼鳥に悪戯しない。しないから、もう遊ばないなんて言わないで。そんなのおかしい。おかしい話。私そんなこと言っていないよ。言っていないのになんでそんなこと言うの、やだよそんなの嫌だ！」

手加減もなくそもそも胸元へと掴みかかってくる手をそっとほどいて、トワイライトは穏やかに言う。

「落ち着いて。わかったから。ごめんな、俺が何か勘違いしたみたいだ。ホーホーの言ったことは、よくわかりました。ので、落ち着こう。な」

「遊ばないなんて言わない？」

「言わないよ。勝手にどこかに行くこともしない。いつも通りさ。

安心してよ」

彼が落ち着き払ってぼんぼんと肩やら頭やら撫でると、ぐすぐす鼻を鳴らしていた梟は目を擦りながらも頷いた。また手加減な

して顔中ごしごしやるのをやめさせながら、

「じゃあ、話は纏まったよね。納得してくれたんだよね？ホーホーは賢いもんな？」

「うん」

「よし。じゃああっち行こう」

ハンカチで顔を拭いて、彼が手をひいてやると梟は嬉しそうな顔をして、いつもの裸足で柔らかに草を踏んだ。

梟は小夜啼鳥に謝罪し、もういかなる紐もリボンも髪も引つ張らないと渋々言った。小夜啼鳥がそれを信じたとは到底思えなかったが。まあ自分だって信じてはいない。嘘でもないのだから、どうせすぐ忘れるからだ。

しかし大人の対応として、小夜啼鳥は謝罪を受け入れてくれた。相変わらずむくれた顔はしているものの、梟が手を洗い綺麗に拭いてくれば最低限の遊びに付き合わないでもないが無愛想に言った。彼女は躍り上がった喜び、では手をものすく綺麗にしてくると言ってまた姿を消した。ひよっとすると張り切った小川まで行ったのだろうか。まあそのうち戻ってくるのだろう。沢蟹でも持つてきて小夜啼鳥にぶつけないことを心から祈る。

そんな一幕の後、そろそろ家に戻るかと彼が考えていた頃合いに。

「さっきの話だけ」

ぶつきらぼうに小夜啼鳥が話しかけてきた。

見返すと、彼女はまた生真面目にしかめた顔で彼の足のあたりを睨んでいた。なにか掴んで壁に投げるような調子で、一言ずつ固い声で不器用に言う。

「覗いたのは私だけ。それに、普段はこんなことしない。私たちは悪趣味な覗き屋じゃない。あなたたちを侵害しない。そこは誤解しないで」

「わかっている。俺頭悪いし、んな細かいとこ気にしてなかったのに。やれやれ、忠告はなかなか役立たないみたいだな。嘘じゃないのにねえ」

トワイライトは嘆息して、肩をすくめた。

「言わんでいいこといちいち申告するんだから真面目だね。損しちゃうぜ」

「まだ俯いている小夜啼鳥のつむじを眺めて、優しい声で話しかける。

「要するに、例えば梟の鳩から留守中に干し柿とか酒とかくすねてる時に、これ今誰かに見られてんのかなとか別にいちいち心配せんでいいって話だろ。神様もたいがい無視して自堕落に生きてるのに、今更そんなの気にしねえって」

「……あなたそんなことしてるの……いえ、それはどうでもよくて。そういうことよ」

顔を上げて呆れた声を出してから、少女はすこし悲しげに付け足した。

「……信じるかどうかは、あなた次第だけど」

「小夜ちゃんは嘘をつかない。あの姐さんもな。なら考えるだけ無駄だわな」

トワイライトはあっさりとそう片付けて、ひょいと彼女の背中を指差した。気軽に続ける。

「そんなことよか、小夜ちゃんよ。その背中の紐な、誰がやったつてもし見咎められたら、俺じゃなくて自分でやったって言いな。そこだけ頼むわ。ほんとにお願いする」

「……いいけど。なぜ？」

また例の仕草できよんとした後、小夜啼鳥が訝る。トワイライトは面倒臭げに顔をしかめた。

「どうもこうもあるかい。俺がいじつたとか言ったらややこしいだろ」

「なぜ」

「ややこしいの。たぶん俺がすぐく困るので、助けると思ってそこはそう言ってください。人助けの嘘は神様も見逃してくれんだぜ。むしろ良い方に得点つけてくれつつかも」

「神様はどうでもいいけど……まあ、わかったわ。そうする」

少女は顔いから、ふと背中を振り返ってすこし困った顔をした。そのまま大人びた口ぶりだ。

「それにしたつてこの締め方は緩すぎる。これでは駄目よ。あとで直して貰わないと。そのときは予めほどいてから言っわ。あの女にやられたと言っけど、構わないわね」

「そりやすまん。加減を聞きやあ良かったな。ただよ、あんまり

締めたら苦しくないかと思つてよ」

「やれやれと言わんばかりに言葉を紡ぐ小夜啼鳥を見て、トワイライトは素直に謝つた。小柄な娘はふんと鼻を鳴らすと腰に手を当て、

「多少苦しいくらい締めないと綺麗に見えない。必要な苦しみは当然の努力であつて、気にならない。生きるのに必要な心得よ。覚えておくことね」

「きつぱりと言つた。その顔は相変わらずの不機嫌顔だったが、これまで色々大人ぶつて教えられたことへの意趣返し^{いしゆがえ}ができて得意そうな色の目をしていた。トワイライトは有難く拝聴し、腕組みして真面目な顔でうんうんと頷いた。

「なるほど。壁に貼つた方が良さそうだ」

「自分ばかりがものを知っていると思わないことよ。あなたの知らないことだつて、世の中にはたくさんあるわよ。きつと」

「訳知り顔でつんと澄ましてから、ふつと小夜啼鳥はなにかを思い出した様子^{まほた}で瞬^{まばた}きした。しかしそれを口に出すかどうかは迷つたようで、視線を曖昧^{あいまい}に彷徨^{さまよ}わせている。

「……どうかした？ なにか気になることある？」

「彼が穏やかに水を向けると、無表情のまま目だけで躊躇^{ためら}つてから、やがて彼女はぼつりと呟く。

「……聞きたいことが、ひとつ」

「今日は色々相談を受ける日だ。

「なんでしようかね、お嬢様。お答えできることなら、なんなりと」

トワイライトは気楽に肩をすくめて笑つてみせた。それを上目遣^{うわめつか}いに見て、その後小夜啼鳥はしばらく黙り込み、やがて口を開いたが。

「……もしかすると自分は何にか勘違いをしており多少おかしいなことを言うのかもしれない、だがその場合は決して笑わず馬鹿にせず貶^{けな}さず誤解である旨だけを簡潔に指摘しこの件は跡形もなく記憶から消去しろ、もし万が一笑い話として今後なにか吹聴することがあれば彼の前歯を拳^{こぶし}ひとつで全てへし折る意思がある、これは脅してはなく本気だといったことをかなり嚴重に念を押しながら、ようやく本題に入つた。

「また糞真面目なしかめつ顔で、小夜啼鳥は厳かに言う。

「……耳の掃除つて、どうやってやるの？」



「ええと……全^{ぜん}聲^{せう}者^{しや}が総じて音声言語を扱うことができないかというところではない。特に後天的なものはまったく発語能力に影響を与えない場合も多い。だから私の鼓膜を破つたところで、私は黙らないので、つまりそれは結局のところまったく無意味かつ互いに虚しいだけの見当外れな単純暴力なのでやめよう。ナイチンゲール」

「なにを言われたのか理解しかねるといった顔で散々目を白黒

させた後、主あるじがようやく言つたのはそんな一言だった。いや、一言ではないか。なにやら誤魔化すような中途半端な笑みを浮かべて、両手を無意味にわたわたさせている。とりあえずその手袋越しの指先を眺めて、ナイチンゲールは憮然ぶぜんと呟いた。

「別に鼓膜を破る気はなかったのですが。今の話から、破つた方が良い気がしてきました」

「なぜ！」

非難めいた声を上げているイドを睨んで、貰つたばかりの道具を掲げる。

「とにかく！なんの為にわざわざ道具ゴウジを用意して貰つたと思うんですか。使う為に決まつてるじゃないですか馬鹿なんですか。耳を掃除する為の道具なんだから耳掃除をするに決まつてるでしょ、他になにをするつて言うんですか」

小箱に収められた細々とした道具。情報を仕入れてから書庫に通つて勉強した結果として、特に欲しかったのは細い匙さしの物だったのだが。用途を説明しこのようなものが欲しいと相談すると、首を傾げながらもイドが汲み上げたのはこうしたものだった。目当ての匙だけでなく色々入っている。材質は金属や木と様々だが、共通点としては大体が指先でつまめる程細く、二十センチ程の長さの棒状をしている。よく手入れされぴかぴかしているがどこか古びており頼もしい。そんな道具たちだ。

ナイチンゲールは手にしたものにとても満足していたが、イドが水をさしてくる。彼女はナイチンゲールが口を閉じるや否や、

小さくこちらを指差して真顔で呟いた。

「薬品の計量とか……模型作るとき、スパチュラ」

「屁理屈はいらなさいです。誰が代用可能な用途を上げるつて言ったのよ」

「いやお前が……」

「今そんなことは聞いてないの！わかるでしょう！」

「理不尽じゃないかな！」

ナイチンゲールが怒鳴るとイドは指を引つ込めて嘆いた。噛み付かれると思つたような動きだった。まったくもう、と不機嫌に呟きながら、箱を開けて匙をひとつ手にとつてみる。

すこし迷つたが、一番小さくて、首のところがとくに細くなつた、しなやかそうな木でできたものを選んだ。金属だと固くて冷たいのではないかと思つたので。人肌に触れるのならば、最終的に選ばれるのは柔らかく温かいものだ。金属は揺るぎなく強靱で確実だが、しかしそれが現実なのだと思えざるを得ない。

ふと胸に湧く劣等感を誤魔化すように、ナイチンゲールは箱の中に並んだ道具たちから目を上げてイドを半眼で睨んだ。相手の方が遙かに長身だが、そのような物理的な高低差は無視することができる。見上げているのに見下すという基本的テクニックを披露しながら、ナイチンゲールは屈いびだ丈高に言い放つた。

「耳掃除なんだから耳の掃除に決まつてるじゃないですか。都度つど鼓膜破るんですか。そんなことあるわけないでしょ。馬鹿じゃないんですか」

イドは困惑した様子ながら、

「鼓膜は一応再生するので……まさかとは思いますが、障子の張り替えみたくて考えてるのかと。違うんだね？では念の為に聞くと、お前の言う耳というのはどこからどこまでを指してるの？外耳内耳中耳とあるじゃない。今の言だと、内耳以内は無事と考えていいの？外から見ると、内耳以前……ただし鼓膜は除外すると考えていい？それとも鼓膜もそれでつく気なの？いや、たとえ破らなくても鼓膜は触るととても痛くどう考えても掃除をするようなものではなく」

普段通りごちゃごちゃ言うのをしかめっ面で怒鳴って遮る。

「鼓膜には触りません！内耳以前ただし鼓膜は除く！それであつてます！耳の中を掃除するの！これで！」

「それで」

びしと突きつけた耳搔きを指差して、イドが嫌そうに確認してくる。ナイチンゲールはそれに応えてふんと言信満々の鼻息を吹いた。

「これはその為の専用の道具です。長きに渡る信頼と実績があります。多少は限定的かもしれませんが、各家庭に常備してある国だつてあるのです。つまり普通のことです」

「限定すれば、各戸に干し首が常備されているところだつてあるわけだが、それは果たしてイコール普通のことだろうか」

「よくそれだけ間髪入れずに尻理屈はつかり言えますね」

「干し首ってさ。現物見ると予想外に小さくてびっくりするよ」

「そんなの見たくもないに決まつてるでしょ！ばっかじゃない！」

わけのわからないことばかり言うイドに思わず手にした物を投げつけそうになりながら、しかしこれは今から役立つのだったと思ひ直して踏み止まる。

ぎゅっと眉をひそめ直して、不機嫌顔を引き締めナイチンゲールは解説した。

「耳の中にはゴミが溜まるのです。壁にひっついて固まるのです。それを剥がして取るだけです。イド様がおかしなことがかり言うのも、ひよっとするとそういつたゴミのせいかもしれません。いつも人の話を捻じ曲げて聞いてませんか？そういうのが治つて、まともになるかも」

「そんなことはないけど……」

「では頭の中で捻じ曲がつてるんですか？」

問われてイドは、ますますの困惑顔で答える。

「捻じ曲げてないよ。特にこの件には真摯に向き合つてる。ごく素直に考えて、耳にそんなもの刺したら危ないよね。私は今そんなにおかしなこと言つてるかな？ねっ。落ち着こうよナイト」

「そんなに私が信用できないんですか？」

「信用どうこうではなくてだね、ひよっとするとなにか勘違いとかがあるのかなつて。だつて耳だよ」

「勘違いではありません。合つてます。文献もあたりました。耳を掃除する文化は実在します」

「お前は信じないと思うけどさ、常に逆立ちして、長い四本の鼻

を使って歩き回る哺乳類だつて実在するんだよ。それはナゾベームというんだけど」

「いるわけないじゃないそんなの」

「ほら信じない。文献いる？」

「今はそんなのどうでもいいじゃないですか。なによナゾベームつて馬鹿みたいな名前前でふざけないでください」

真顔で言われてかちんと来たナイチンゲールが口早に言い返すと、イドはまだ真面目な顔のまま再度小さく指を指してきた。

「ナゾベームね」

「そう言いました！」

「いや確かにナゾベームと……」

和然わんぜんとしな顔で首を傾けているイドを断固遮る。

「耳がおかしいですね。やはり掘るべきです」

「掘るの」

びつくり顔になったイドに乱暴に頷いてみせ、

「そのように表現する場合もあるようです。とにかく！そろそろ観念してここに寝てください！鼓膜を破られたくなければ！」

ナイチンゲールは長椅子に腰掛けた己の膝の上をばんと叩いた。イドは得体の知れない異臭を放つ物体でも無理矢理鼻先に突きつけられているような表情で呻く。

「理解に苦しむ」

「苦しんでいいからとりあえず寝てください」

「ええー……」

その後もイドはしばらくごちゃごちゃ抵抗したが、なんとか説き伏せて横にならせるまでには漕ぎ着けることができた。束ねていた髪はほどいて、靴も脱いで長椅子に横たわっている。正確には、その端に座った自分の膝の上に頭だけは載せた格好で。

「具合はどうでしょうか」

見下ろして尋ねると、イドはクッションの上でもそもそも落ちて着かぬげに身じろぎした。膝だけだと安定が悪いのではないかと思えたので、頭との間に用意した物だ。厚すぎず薄すぎず、首も支えているのでしばらくこの体勢でも苦しくはないと思われる。ちゃんと色々配慮したのだが、相手はまだなにやら非常に不可解そうな顔つきをしていた。

「いやいいと思うよ、今の時点では別にねなにも問題ない。今の時点まではね。膝枕つていうのもそもそも一体どうなのつて感じするけどさ」

「嫌なんですか。これが正しい作法なのですが」

「いやお前の膝枕自体はなにも嫌じゃないよ。とてもいい具合だと思う。ただなにかこの行為いかがわしいものなんじゃないかって気がしてますます疑わしく」

「髭ひげの中年男性がまた別の髭の中年男性を膝枕して処置している図もありましたが」

「それは誰が得するの？」

心底不可解そうにイドが呻いたが、うんざり顔で眉根を寄せる彼女に構わずナイチンゲールはじつとその耳だけを観察する。寝

かせてみて、気付いたこともあった。進言する。

「……ピアスは外してください。危ないので」

「えっ。なんで。外耳道がいじどうになにかするんだろ？ 耳介じかいというか、耳みみにまでなにか今危険があるの。ちよつと待ってくれ覚悟が追加で必要になったので三分ほど時間を」

びくつとして慌ててまたごちゃごちゃ言い出したイドを遮って、溜息混じりに言う。

「までって言うのは……まあいいです。聞き流します。別に大したことでないです。揉むだけです。ピアスは邪魔です」

「揉むの」

また予想外の単語を聞いたという顔で繰り返してくるイドに淡々とナイチンゲールは説明した。

「はい。揉んだり、引つ張ったりします。それ自体にはなんら危険はありませんが、ピアスがあると痛いのではないでしょう。だから提案しただけです」

「どうなんだろうそれは。やったことがないんだけど耳をそんなふうにするのってどうなんだろうか」

「それが正しい手順です。間違いないです。あと、これは道具がいらないので私は自分の耳でよく練習しましたが……悪くないと思います。痛くもないですし」

つい熱を入れて練習しすぎて耳が真っ赤になってしまい、食卓で向き合ったイドに熱があるのかと聞かれたときには焦った。その場はなんとか切り抜けることができた。怪しまれることなく。

そんな努力が重なって、今このときなのである。逃すわけにいかない。

「それは耳の中と外とどちらを先に処理するのだろうか。そもそもどのような流れなのか、施術される前に被験者の権利として最初から最後まで手順をまず聞いてからでもいいだろうか」

イドは不安そうな顔をして、ぶつぶつと尋ねてくる。ナイチンゲールは冷静に答えた。

「説明の義務のない、あるいは説明してはいけない実験というものも多々あると思います。ご存知かと。小麦粉を渡した者にこれは偽薬だとまず説明してはなんの意味もないでしょう。ピアスはこちらで外してもよろしいですか」

「いやそれは構わないけど。あ、今のはピアスについてであって」
「失礼します。……外れました。ここに置きますので。痛くなかったでしょうか」

「痛くないよ。つまりとにかくピアスについての話ね。この耳の掃除が痛くないのかについては私は非常に疑問を抱えており」
ナイチンゲールはまだまだ長く続きそうな話を溜息で遮り、

「痛くないらしいです」

「伝聞」

「うまく行えば」

「条件付き」

「耳は痛覚が少ないです」

「それは耳みみの話だ！ 耳の中には痛覚というか、神経がかなり繊細

に存在してる部位だ！鼓膜の奥はいきなり内臓だぞ。皮膚も薄いし、脳にも近いし、傷による感染症だのなんだの、とにかく色々怖いので、だから不用意に触ってはいけない。普通触らない。うん、やはりこれはあまりよくない行為だと思ふ。間違っている。誤った民間療法的なものだと思ふ。やめようナイト」

淡々と応じたが、またイドがぎゃあぎゃあ騒ぎ出した。ほぼ立ち上がろうかという動きを見せたので慌てて肩を押さえて寝かす。耳元で冷静に囁く。

「大丈夫です。勉強しましたので。完璧に近いです」

「なにひとつ実践してないじゃないか……」

無理矢理押さえつけられたイドが半泣きに近い声で呻いているが無視した。ナイチンゲールの腕力に、力で敵うわけがない彼女は物理的な抵抗は諦めて悲しげに呟いている。

「せめて道具を用意してから、まず自分の耳を……あ、でもそれはまずまず駄目か。見えないんじゃないぞ。危なすぎる。絶対にやってはいけない」

「先に道具だけ貰っていたら、なにかしら言い訳して逃げられるかと思つたので。もうご自分でやつたのでいいとかなんとか」

「ああ、あとで自分でやろう。それだ。賢いぞ。そうしようナイチンゲール」

「あなたは馬鹿ですね。たつた今自分でやるのは危ないと言つたのは何だつたの？」

冷たく言つてやると、猫からの活路だと思つて突っ込んだ先に

粘着式の鼠取りがあつてにっちもさっちもいかなくなり絶望した鼠みたいな顔で、泣き泣きイドが言葉を紡ぐ。

「なぜお前が突然こんなことに興味をもつたのかわからないが……迷信的未開の民間療法の一つではないかとしか私には思えない。他人の耳の中を尖つた棒で引つ掻くなんてどうかしてる。どうかしてるよ。これは拷問の一種なのだろうか。でも鼓膜は触らないというし。千枚通しでも持つて来られたなら、私ももう腹を括るといふか、しっかりと諦める気になるんだが、なにか中途半端というか。なにをされるんだかさっぱりわからない。つまり覚悟のしどころがわからなくて、こういう一番怖いというか苦手というか」

「ちなみに、耳介に鍼を刺すというのもありましたが、そこまでの技術は自信が持てないので勉強から潔く省きました」

「よし。やはり拷問だな。しかも子供向けにその子供自身の判断から勝手にあちこち簡略化されているわけだ。なるほど。理屈もなにも破綻しているのだな。最悪のパターンか。よく理解した。相当酷いことになる」と

辛そうな顔でぶつぶつ言っているイドに説明を付け加えると、彼女はなにかひとつ納得したように頷いた。死期を悟つた顔になつて膝の上の身体がぐにゃつと脱力し、自暴自棄な感じに柔らかくなる。

ナイチンゲールは呆れて溜息をついた。

「違います。私の出自について覚えていますか？」

イドは相変わらず死んだ鼠の目だったが、

「御伽の国支那だ。どうすれば忘れるのか逆に教えてくれ」

迷わずにそう答えた。ナイチンゲールは頷く。

「そこではこれを生業なりわいにしている者もたくさんいました。本で読んだのです。間違いないですね。金の匙や銀の匙を使い分けて、やわらかい水鳥みずどりの羽も使って、皇帝のお耳みみに御勤おつとめする係かかりが出てきました。一冊の本ではないです。よって、普通の行為です」

「よし、ひとつずつ諦めがついてくるぞ。やはり迷信的未開的民間療法なわけだ。間違いない。今の話から確信できた」

「勝手に諦めてなさいよ。失礼な人だわ」

ナイチンゲールはむくれて言った。ちなみに片方の髭ひげが皇帝で残りの髭が耳掻き師である。挿絵ではどちらも楽しそうにしていた。

「なぜ怒るんだ。お前はいつもすぐ怒るが、ことこの行為の前には怒って欲しくない。せめてよく落ち着いて欲しい。手元が乱暴になるとさらに怖い。暴力反対」

「あなたがごちゃごちゃ言うから腹が立ってきたんじゃないですか」

「言いたくもなるよ。耳の中を細い尖った……」

情けない声で何度も不平ばかり言われて、いい加減にむかつつ来てナイチンゲールは手にした耳掻きの先でイドの頬をちくちく突いた。

「細いですが、尖ってはいません。刺さりません。ほら、刺さ

ないでしょ」

「痛いやめてつつかないで。でも時には鈍い刃物の方がかえって辛いことも備まもるし……ああ、なるほど、やはりそういう」

「拷問ではないのですが、どうしてもそういうのが宜よろければ私も色々考えますが」

半泣きで耳掻きから顔を背けるイドをつつき回すのはやめて、ナイチンゲールが怖い声を出すとイドはしばらく黙った。そして虚空を半眼になつて睨み、ぼそりと確認してくる。

「鼓膜には触らない」

「はい」

「どこからも出血しないし、痛くないし、危険もない」

「努力します。そして間違はなくそのようなことはないとお約束します。私のこの外殻からだにかけて誓ってもいい」

「お前がそう言うならそうなんだろう……」

押された念に、落ち着いて答えると主はどうとう納得してくれた。やはりなにか諦めたような顔にも見えるのだが、それでも身を任せようとは思ってくれたら良かった。

死んだ鼠よりは多少はましかという程度の態度、強張った身体と遠い目でイドは膝の上に頭を載せている。

一旦黙った彼女の耳を、アルコールに浸した脱脂綿でそつと拭いた。もし普段注射を受ける前の自分もこんな様子なら反省しなければいけないと思わせる顔で、相手は気化熱の冷たさに頬の辺りを強張らせている。

静かにナイチンゲールは呟いた。

「なんでもご存知なのかと思っていました。意外です。必ずしも、そうでもないのね」

イドは溜息をつく気力もないと言いたげに、

「これは知らなくてもいいことではないかな。知らなかったことで、別に誰からも責められはしないのではないだろうか。たぶん、そんな気がするよ」

無気力な顔でぼやいている。それを見下ろして。

「……とても気持ちがいいらしいのですか」

多少躊躇^{ためら}ったが、ナイチンゲールはそう呟いてみた。薬の効き目を確かめたければ、偽薬か否かを被験者に伝えてはならない。しかし不安を拭えないかと思っただが、イドはなんら変わらぬ態度で横を向いたままだった。ぼそぼそ唇だけが動く。諦めきつて白けた声音。

「阿片^{アヘン}だのヘロインだのもとても気持ちがいいがやってはいけないこととして一般的に知られている。理由は代償として確実に身体を損ない危ないから。これもそうだったことで、うまくいけばそれなりの見返りがあるのかもしれないが、失われるものも多いのではないだろうか。だから禁じられているのでは。ちなみに、パッドトリップというものもあって。そうなるともうなにも得られないと言いかひたすら一方的にただ失うだけと言うか」

「ほんとにうるさいと言いか往生際が悪いと言うか。あと、別に、禁じられていないと思います」

「禁じるまでもなく危ないってわかるものな……あれ、なんで私はこんなことに付き合われているのだろう」

虚ろな目で呟くイドにナイチンゲールは顔をしかめてきつく言い返した。

「ちょっと黙ってくださいませんか。優しくしようという気がどんどん薄れるのです」

「ひどい話だ。まったくひどい話だよ」

「黙ってください!」

ぴしゃりと言うと、びくつとしてイドは動かなくなった。上から睨みつけたまま、きつい声で言い聞かせる。

「……いいですか。私がいいと言うまで、黙っていてください。返事は」

こちらを見ようと目を動かすこともなく、主は黙ってこくこく頷いた。

「よろしい。あと、動かないでください。動くといけません。それはわかりますね、馬鹿でもわかりますね? わかったらこれ以降は頷かないでください。返事は」

主は瞬き^{まばた}をふたつした。なんらかの合図のつもりらしい。頷かなかったので、イエスでいいのだろう。

「よろしい。じゃあそのまま黙ってじっとしててください」

主は無反応だった。動くなどだけ言ったので、返事もしない方が良く考えたのか。瞬きのサインもなかった。ようやく大人しくなった、とナイチンゲールは嘆息する。そして目を伏せる。

「では、失礼します」

そうっと、両手で耳に触れてみる。

「あ、外側からなんだ」

いきなり喋り出したイドに口を尖らせてナイチンゲールは言い返す。まあそうそう黙るのも思っではいなかったが案の定だ。

「黙ってて言っただのに」

「いやだつて気になってさ……これはだんだん、外から内に入っていくものだと考えていいの」

「なにも考えなくていいですから黙ってじっとしてて。喋ると頭が動いて危ないじゃないですか」

むにむに耳を揉まれているイドは、とりあえず今すぐ頭の中に棒を刺されることはないかと判断したためか、多少安堵したような顔をしていた。余裕を取り戻して、いつものなにか面白がるような笑みさえ見せている。

「まだ多少動いても危なくなさそうだと判断したので……その間に喋ろうかと思っただけ」

「喋らなくていいのです。まさか黙ると死んじゃうの？そんなこともないでしょうに」

「黙るくらいで死ぬのなら、挑戦してみてもいいがね。さて、それはどれくらい黙っていればいいのだろう。仮に百年間黙っている人間がいるとしたら、それは死者とどう見分ければいいのだろうか」

「どうあつても黙らない……」

調子を取り戻してきた主にうんざりし、顔をしかめてナイチンゲールが唸っていると。

「あ、なんか、意外と気持ちいいかも」

不意に、きょとんとした顔をしてイドがそんなことを言った。

「耳なんて引つ張つてもただ痛いだけではないかと思っただけだ」

……あ。気持ちいい。うん」

これまで、喋りながらもずっと手は動かしていた。それについてふとなにかの閾値を超えたといった様子で、イドは素直に驚いた顔で目を瞬いていた。しかしまたすぐに緊張の面持ちになる。

「でも油断してはいけない……ここまでは実践訓練したという話だった……問題はこれ以降だ、これ以降」

己に言い聞かすように呟いている彼女には委細構わず、ナイチンゲールはしばらく練習した手順でその耳を揉んだり引つ張ったり折り畳んだりしていた。主はなにやら喋り続けてはいたものの、されるままになっており、その間にまた段々呑気な顔になってきたり、はっとして緊張し直したりしていた。こちらはこちらで覚え込んだ手順を飛ばさぬようにと集中していたので、もう放つておいたが。

適当な頃合いでナイチンゲールは耳搔ぎを手取る。耳介の複雑な窪み、その上部にそつと木匙の先端を当てると、イドはまた意外そうな声を上げた。

「え。その道具は外にも使うの？中はどうするの？」

「こちらからも聞きたいのですが、いつ黙るんでしょうか。私は

警告なくこの道具の先を耳の中へと移行しても構いませんか」

嫌そうに顔をしかめるイド。

「それは危ないのでやめてほしいなあ」

「では黙るべきではないでしょうか。簡単な話では」

「警告を出してくれるという選択肢は」

「なぜぎりぎりまで喋ろうとするの。世界の終わりが来ても喋ってるんでしょ。知ってるんだから」

むくれたナイチンゲールがそう言うと、イドはきらりと目を輝かせ、楽しそうに笑った。

「世界の終わりとは……また面白そうなので、それは喋るだろうなあ。黙ってはいられない気がするよ。なかなかの見ものではないだろうか。ひどく騒々しいのだろうか。それとも静かにそつと訪れるのだろうか。なんにせよ危険は伴いそうだな。備えて臨まねば。足元には注意の上、お前は私の指示によく従うように」

「うるさい」

喋りながらも手は止めなかった。しばらく慎重に耳の窪みをなぞっているうちに、段々イドはまた不思議そうな顔になってきて、やがて自発的に黙った。警告なしの耳孔への侵入を警戒しているのかもしれない。手元を照らすスタンドランプの灯りを調節してから、耳を軽く引つ張って中を覗き、よし、と確信を得てからナイチンゲールは穴の中へと駒を進めた。

灯りは万全を期すならば、石を使って本当の手元に作られたかった。しかしそんなくだらないことで無駄遣いを云々とイドが

説教モードに入っても台無しなので、ナイチンゲールはポケットの中に隠し持っていたその欠片を使うことは見送った。

イドが、黒い水から精製する結晶——オランダイア黒曜石に似た、漆黒の石。光沢があり、透き通るようできて決して見通せない。硬いが明確な劈開性を持ち、鑿があれば大きさの調節は容易い。

それは指向性を持たない純粹な魔力の結晶であり、単純な手順を踏めばまるで魔術師の才能がない自分でも手軽に様々なことができる便利な代物だった。莫大な魔力、平たく言えば井戸に溶けたいる、いろなものが濾過され純化され反則的に圧縮された挙句のその素直な欠片を生贄に捧げれば、大体の奇跡は容易く起こせる。

名前はないが、強いて挙げるなら俗に言う賢者の石だとイドは言う。だが仰々しく気恥ずかしいと今更ながらのことを言い、普段は単に「石」とだけ呼んでいる。ナイチンゲールもそれに倣う。

これに頼る限りは上達できないとイドからはいつも苦言を呈される。わかつてはいるのだが、努力しようと思っても、目の前に手軽で確実な道があればどうしてもそちらを選びたくなることもある。与えられる数は限られており無駄遣いはできない。灯りを作る程度なら、ほんの小さな欠片で事足りるはずなのだが。

幸い、ランプの灯りだけでも、手元が覚束ないということはないさそうだった。イドに小言を頂くことはなさそうだ。

そつと耳の中に触れてみる際には、これまでで一番の注意を払った。

その際また驚いたイドが喋り出しては危ないと思ったので、失

礼します、とまずは小さく声をかけることも忘れなかった。

主は黙っていた。

他人の耳の中を覗くなど初めてのことだが、見てみればそこにはなにもなかった。まったく、なにも。期待していた汚れというようなものはないとひとつ存在せず、ただ滑らかな皮膚だけが見えた。これは掃除をする必要がないのだろうか？とナイチンゲールは非常に戸惑ったが、始めた手前ここで引き下がるのもおかしいと思つて進軍することにした。

そつと、できるだけそつと、耳の中の壁を搔いてみる。小さな小さな匙は繊細に削られており程良いしなりを持っていて、指先の力加減を忠実に反映した。いつもの通り、イドはちゃんと良いものを用意してくれた。これはきつとあの髭の皇帝に使われていたお道具に違いなかった。ならば後は腕だけだ。

汚れない以上別段なにが綺麗になるというわけでもないのだが、そんな調子でしばらく入り口から乾拭きのような気分で耳の中を擦つていた。イドは珍しくずつと黙っていたので手元だけに集中できた。そつと、そつと、傷付けないように壁磨きを続けていると、やがてイドがとても慎重な感じで唇を開く気配があった。

「……これまでの様子から判断して……今そつと、喋つても、たぶん危険はなさそうだと思うので発言するのだが」

実際、囁き声程度だったので頭はほとんど動かなかつた。ナイチンゲールは尋ねる。

「なんででしょうか」

イドはそのままの声音で即答した。

「とても気持ちがいい」

きよとんとしたので、手が止まりそうになる。慌てて作業を再開するが、イドはその間にも囁き続けていた。

「今のところやつてくれたこと全部とても気持ちがいい。とてもというか、かなり。なんだろうこれ、あまり他で経験したことがない類の快楽というか、ゆるさというか、状況的には緊張せねばならぬのにどんだん油断して行くというか」

笑うでもなく、ただ曖昧に不思議そうな顔をしている主に、ナイチンゲールは数度瞬きしてから重要なことを確認してみる。

「痛くないですか」

「痛くないよ。全然。ずいぶん上手だ」

イドはゆったりとした声で穏やかに答えた。そのまま続ける。

「ええと……なんの話だつて。ほら、油断する。だから……そう。緊張だよ。これ、だんだん奥まで行くんだよね」

「可能な限りは」

「すると危険は増すと思うのだが。私は万一の痛みには備えていない。いいのだろうか」

「もう一度誓うべきでしょうか」

皮肉ではなく言うと、主は当たり前のことを忘れていたという顔で納得を呟く。

「ああ、そうだった。それなら、そうなんだろう。だとすると

……ええと、なんだっけ。うん、そこでも気持ちいい。できればもうちょっとだけ強く。んん……あ、じゃなくて、ええとね。私は油断していいわけかな？」

「問題ないかと」

「かなりぼうっとしてるんだけど。油断するとかかなり。本当に。時々ほぼほにも考えてない。白いぼんやりした空隙を曖昧に覗いてる自分を発見しては、はっと戻ってきている。ひよっとすると、あれが先程話題に出た世界の終端かもしれない。いやなんだかよくわからない今の。とにかくそんな感じで、かなりなにも考えでない。あまりよくないのでは」

「問題ないかと」

「そう……かな。うん。まあいいか。えっと……それで、あと下手をすると……いやさすがにそれはないか。ええと、ああそうだ。足は疲れない？頭というのはそれなりに重と思うが」

「まったく。問題ありません」

「そう。あ、ちょっと待って咳が出そう……さつきから時々……急に……あ、そうか、これは迷走神経の反射なわけだ。納得した。そうか」

「実際かなりぼうっとした調子で、とりとめもなくそんなことを呟いているイドを見下ろしてナイチンゲールはまた瞬きした。不思議に思っで尋ねる。

「耳をいじると咳が出るのですか」

「うん……そういう場合もあるかも……でも我慢できる範囲だか

ら。危なくないのでやめなくていい。ええと、どうしても我慢できなくなったら、膝を軽く叩く。その時だけ手を止めてくれれば」

「わかりました。続けます」

「うん。黙った方がいいだろうか？」

「およそ珍しい発言だった。そうですね。可能なら、そのように」

「わかった」

ナイチンゲールが内心びつくりしながら応じると、イドは素直に答えてまた口を閉じた。

また手元に集中し直し、作業に没頭しようとして――

ふと、確認するべきことを思い出しナイチンゲールは主の横顔へと語りかけた。

「もし万が一、私に不手際があり、痛い思いをさせてしまった場合もただちにそのように合図をいただけますか」

イドはなにを言っているのだろうかという顔をして、しかし相変わらずぼんやりしたまま、了承の意を示す。

「危険もないし痛くもないんでしょ……そう聞いたのでまずないことのはずだが。まあ非常時に備えることはいいことだ。理解したよ」

こちらもまた皮肉でもなんでもない調子でそう呟いたイドは、その後はまた沈黙して、時々ゆつくりと瞬きだけしているような気配があった。膝の上の身体がいつの間にかゆつたりと脱力していることにふと気付きながら、ナイチンゲールはせつせと小さな

穴の中を磨くことに精を出した。

五分か、十分か。没頭していたので時間を忘れていたが、やがて膝の下あたりにちよんちよんと触れるものがあることに気が付き、はっとしてナイチンゲールは手を止めた。

「咳が出ますか。まさか痛かったですか？ごめんなさい。もうやめましようか」

慌てて言うが、主はぼんやりと弛緩しかんした表情で何度か瞬きしただけだった。なにを言いたかったのか見失ったような、しかしそれさえどうでも良いような顔をして、

「んん……そうじゃなくて……やめなくていい。手は止めず続け。ええと、なんだつけ。ああ、そうだ。ごめん。さつき言いかけたことだ。まさかとは思ったんだけど……」

のんびりした声音を出したので、ほっとしてナイチンゲールは胸を撫なで下おろした。

「良かった。なんですか」

イドは相変わらずぼんやりとしている。口調もいつもより遅くすぐ曖昧に途切れる。

「そのまさかというか……」

「はい」

「うつかりすると寝ぞう」

ナイチンゲールはまたばちばちと瞬しかきした。呆気にとられて、返事が遅れる。

「……それは油断してですか」

「んん……油断が行き過ぎてやはりよくないだろうか……でもこれ際限なく弛緩していくぞ色々……やっぱり寝るのは駄目かな……がんばってこのぼんやりと戦うべきか……」

「あ、戦わなくていいです。眠たければ、寝てください」

ナイチンゲールが慌てて言うと、イドはとろんとした目をこちらの方へと向けて呟いた。真横を向いて寝ているのでナイチンゲールの顔は決して見えまいが。

「そう？ほんとに寝てもいい？たぶんこれ、このまま続くとかなりの確率で寝てしまうと思うんだけど」

「はい。どうぞお休みください」

「足が疲れないだろうか。終わればすぐ起こしてくれば……」

「足は大丈夫です。お気遣い感謝します。ただ」

「うん」

「反対側もありますので、その時だけこう、ころんとなっていただけです。あとはまたお休みくださって結構です」

イドは頷くような気配だけ見せて、ぼんやり言う。

「左と右でなにか違うことはあるだろうか」

問われたところでこちらも未知だが、「対たいであることを踏まえればそう違いがあっても変なのではないだろうか。よく考え、そう判断し、ナイチンゲールは真面目な口調で答える。

「どうでしょうか……さほど、違いはないのではないかと思うのですが」

「そうか。ならもしかするとお前の言う通り寝てしまっても」

「はい。その際はなにも仰らなくていいです。眠くなったらそのまま寝てください。もし何か不手際があれば」

イドは小さく挙げた左手をひらひら振って、いたって気楽な確信を持った口ぶりでこちらを遮った。

「ないって、ない。それはないから。じゃあ私はこれを堪能し可能な限りぼーっとしているので……できるところまでやっちゃって……」

そう言いながら目を閉じる。その様子を見てみれば、ここまではなんとか目だけは開けていようと努力していたような気配だった。それも放棄したらしい。

温い微睡みの中に無警戒に全身没り込むような様子で、イドはうっとりとした瞼を伏せている。微笑みもなく、ただ安らいだ顔をしている。

まだ呆気にとられた気持ちを維持したまま、ナイチンゲールは慎重に尋ねてみる。

「気持ちいいですか」

「うん」

イドはこともなく同意して、ふと薄目を開く。声はほとんど眠りの中から響いてくるようにくぐもり深くなっている。

「これまた奥あるのかな？」

なにを聞かれているのか一瞬考える。まずは危険についてだろうかと思い、しかし弛緩しきった主の様子を見るに違うのだろうかと思える。しばし頭を捻って、

「ええと……安全な範囲で、できるだけお楽しみいただけるようにはいたします。少なくともまだしばらくは続けられますので」

答えは彼女の求めるものだったらしい。満足げにまた目を閉じて、イドは深く吐息をついた。

「わかった……では寝てしまったらごめんね……あれ、待てよ寝ると損なのかな。やはり頑張っただけ起きていた方が。でもかなりすでに寝そうになって」

うとうとと目を閉じたり開けたりしている横顔に、ナイチンゲールはそっと笑いかけた。

イドからはこちらの顔は見えない。

「そこはお好きなようになさってください」

「ん……」

否定とも肯定ともつかぬ声を出して、イドはまだゆっくりと瞬きだけ繰り返していた。やがて目を閉じている時間の方が長くなり、最終的には瞼を下ろして眠り込んだ。

できるところまでよく磨けたと得心行つてから、微かに寝息を立てる主を起こさぬように、ナイチンゲールはやわらかい水鳥の羽で内外の埃を払った。それからそっと声をかけて反対側を向いてもらったが、イドはもう最初から無抵抗に寝入る構えで終始ぼんやりしていた。

主が黙れば井戸の底は静かだった。ナイチンゲールは穏やかに微笑んで、小さな穴の中を丁寧に磨き上げた。悪い気分ではなかった。

「気持ちよかった」

長椅子に座ったイドが、ものすごく驚いた顔で断言した。

そのまま腕組みし、なにやら首を捻って考え込んでいる。

「民間療法を馬鹿にしてはいけないかった……恐れ入った……これなにか代償は本当じゃないの。後からガツと反動が来るとかかないの？急性カプエイン中毒の発作みたいなのが突如起こるとか」「それがどういったものなのかちよつと……いえ、とにかく、そういったことはないはずですが」

具体的なことはわからないが、そう急激なしつぱ返しはないはずだった。戸惑いがちにナイチンゲールは答え、そして付け足した。

「ただ、先程仰った様に傷めやすい場所なので。頻繁に行つてはいけません。適切な間を開けるべきだとのことでした」

「なるほど。どれくらい？」

真面目な顔で尋ねるイドに、自分も真面目な顔で答える。

「三週間から一月程……とのことですよ。ただ我慢できず毎日何度も自分で行うような者も多いので、それを続けられるときに重篤な外傷を負ったり、場合によっては病気になるります」

「なるほど。やはり中毒者が出るか。納得できる話だ。そして病気とは」

イドはうんうんと頷いた。勉強してあったのでナイチンゲール

は自信を持つて即答できた。

「外耳道炎や中耳炎。とんで癌です」

「また派手に飛ぶな」

少し呆れたようにイドが言うが、ナイチンゲールは蘇る不愉快な記憶にぎゅつと眉根を寄せた。口惜しく呟く。

「中耳炎は……辛いじゃないですか。あれは、かなり、かなり辛いですよ。なぜあんな病気がこの世にあるのかと私は」

「ああ……そういえば寝込んだことあったな……だいたい、お前はいつもなぜ不調を限界まで黙っているんだ。そしてそれを通り越していきなり会話中に蹲つたまま動かなくなるのはやめてほしい。大丈夫です大丈夫ですとか謙言してみても見られるから大丈夫ではない。誰も納得しない。心臓に悪い」

「だってただの風邪だと思っただけのもの……」

完全に呆れた顔になったイドに仏頂面で呟くと、びしと指を突き付けられ反論された。

「高熱！耳の激痛！難聴！」

「……我慢していればやり過ごせるかと」

「やり過ごせてない。気付かなかった私も悪かったのだが」

「あのときはなにか他のことにご執心で……私のことは三日程完全にはたらかしていた時期でした。なにを言っても生返事ばかりで。部屋に閉じこもって。ですので、些細なことで声をかけにくかったということもありました。そうよ。今思い出した」

「悪かった。私が悪かった。ああそうだ、だいたいのは、私

が悪いとも。悪かったよ」

目を閉じて諸手を挙げ、溜息交じりにそう降参してから、イドはふとなにかを思い出すような目つきで眼を開けた。

「そうか。そんなこともあったな。つまりは……」

ひとり呟きかけ、しかしまたふつと別のことを思い出してこちらを見上げてくる。彼女の興味と話題が自由にあっちこっちに飛ぶのはいつものことだ。

「あ、そうそう。なにか取れた？」

「あ、いいえ……ほとんど汚れていませんでした。掃除と言いましたが、実質、乾拭きというか、マッサージのようなものになりました」

用意していた紙にはなにも取れなかったのだが、一応見せるとイドはふうんと言つてなにもない紙の上をしげしげ眺めていた。

「そうか。でもずいぶん長いこと丁寧にやってくれたね。なにか取つてるのかと思つてた。後で見せて貰おうとすこし楽しみにしていた。残念。となると、お前は退屈ではなかったかな」

「いえ、お気に召したようだったので、合わないようでしたら、早々に切り上げようと思つてはいたので、思いがけず……」

ナイチンゲールが素直にそう答えると、イドは紙から顔を上げてまた真顔で何度か頷いた。

「いや恐れ入ったよ。本当に。うん、お気に召しました。そうとしか言えない。ケチをつけるとしたらいつか必ず終わりがあることくらいだ。いや、終わるからこそいいのかな。右と左を間断な

くどうにかして交換する方法とは……とか、無駄なことをさつき真剣に考えていた。だがあのインターバルがあるからこそいいのかもしれない。参ったよ。まさかこんなことになるとは」

ナイチンゲールは多少ならず面食らっており、毒気を抜かれて頷く。

「私もここまで気に入られるとは。私は素人ですし」

「いやとても上手だったと思う」

イドはひどく感心した口ぶりで即答した。嬉しくなつてナイチンゲールはすこし優しい声を出した。

「痛くなかったですか」

首を横に振るイド。

「まったく。ずいぶん気を遣つて慎重に丁寧に扱つて貰ったものだと思う。評価できる集中力と精密性だ」

「ありがたいございます。よく勉強しましたので。活かされて幸いです」

真面目くさつて難しく話すのも、普段よりずつとうまくいった。ナイチンゲールはイドの前に立つたまま、達成感を得て誇らしげに胸を張った。

「こちらこそありがたい。食わず嫌いはよくないと実感した。ふーん……いやあ、驚いた……」

口元に手を当てて、言葉通り感嘆の様子でしばらく無言でなにか考えて、イドは頷いてナイチンゲールへと向き直った。

「あとでなにかご褒美あげる。なにか希望があれば考慮するので

考えておきなさい」

「……ありがとうございます」

ナイチンゲールはいよいよ驚いて、目をぼちくりしてからそれだけ呟いた。ご褒美まで貰えるというのは相当な功労の場合のみである。手にしたままだった細い木匙をしげしげ眺めていると、それに興味を持ったらしいイドが貸してと言って手を出してきた。渡すと、物珍しげにしぼらく矯めつ眇めつし、ふむと頷いてイドは目を伏せて穏やかに笑った。

「とても良い体験だった。ありがとうございます。お前は主人思いの本当に良い下僕だ。では」

なにかを催促されたのだが、なんだかわからず首を傾げてナイチンゲールは聞き返した。

「なんですか？」

「なについて、交代。次はお前がこつち」

「え？」

イドは横に置いてあったクッションを拾い上げ膝の上に乗せた。そしてにこやかに微笑む。

「これはとても良いものだ。お前も体験してみるべきだよ」

「えっ？いえ、あの私は」

完全に不意を突かれて露骨に動揺してしまつてから、慌ててナイチンゲールは生真面目な渋面を作った。

「結構です……あの、失礼に当たります。主人に耳を掃除させるなど」

「気にしなくていいのに。ああ、じゃあ、私がやりたいからやるだけ。耳貸して」

けるつとした顔で明るく言われて、ナイチンゲールは慌てて不機嫌に言い募った。

「よ、汚れていませんで！つまらないと思います！」

イドは明らかに答える。

「そう、それもあつてさ。さっきの中耳炎の話。あれ以来お前の耳は見たことがないしどうなっているかなあと」

「汚れていません！」

「汚れがなくても非常に気持ちがいいと実体験として知っている。ぜひ試すべきた。さあ」

「結構です。自分でします」

いくらつつけんどんに突き放しても、相手は全然めげなかった。確信を持った顔で機嫌良く話すだけだ。

「自分でやるのは危ないので先程禁じた。私がしてあげるの、ほら」

「遠慮します。だつてイド様何も知らないじゃないですかド素人じゃないですかそんなの危ないもの」

「自慢じゃないが手先は器用だ。それに先程お前が長時間丁寧ほどに施してくれたので……方法と加減はわかった。鼓膜は触らない、出血も痛みも危険も伴わない。お前の美貌に誓つて保証するよ。だから安心して」

そこまで言われれば疑うわけにもいかなかったが、こちらにも

折れられない理由がある。苦渋の顔でナイチンゲールは断り続ける。

「……結構です。あなたへの一切の不信ではなく、とにかく、私はいいですから」

「絶対気に入るから。これはやってみるべきだって」

「……お気持ちだけ受け取っておきます」

笑顔ではふふふ枕を叩いているイドを睨んで、ナイチンゲールは両手で耳を隠した。

「おいでって」

「いや」

「来て。そして左耳を上にしてここに寝なさい」

相変わらずにここをこしていたが、とうとう命令形でそう言われ、ナイチンゲールはせめてもの抵抗として苦々しく呻いた。耳はまだ両手で押さえたまま。

「……今のご命令で、左耳をご指定になったのにはなにか意味があるのでしょうか」

イドはご機嫌の顔で淀みなく答えた。

「お前が左から始めたのでそれが作法なのかと思ったが違うのか？まあいい。なんにせよ私は今後必ず左から始めると思う。なぜならお前がそうしたから、そして私を非常に驚かせたからその記念だ。だが別に、お前が右耳を先に始めることに強い拘りを持っているのならそれを尊重する。例えば今丁度痒い方を先にしたいとか。だが個人的には、あえて痒い方は後に回した方が楽しいの

ではないかという気もする」

「……別にそんなこと記念にしなくていいのですが」

「良いことはよく憶えておきたいものさ。違う？」

屈託のない顔でイドは笑った。ナイチンゲールは目を瞑り思いつきり顔中をしかめてみたが、やがて不承不承諾めて両耳から手を離れた。

とりあえず、髪を下ろした。そして靴も脱いだ。長椅子の下に揃えて置いて、椅子の上上がる。できるだけゆっくり動作したが、そこでやることなくなくなってしまつて立ち尽くした後、仕方がないので渋々膝立ちになってから左耳を上を横向きになった。

「……失礼します」

「はい、おいで」

気軽に応じてから、また耳を覆っていたナイチンゲールの手をひよいとどけ、イドは興味深げに耳の中を覗いた。

「どれどれ」

「……あの。汚れてませんよね」

「あー」

「汚れてませんよね！」

なにか納得したような声だけ上げて、こちらが聞くことに答えてくれないのでナイチンゲールは声を大きくする。

「あのー私の耳別に汚くないですよーどうなんですかー」

「あーこれは。なるほど。遣り甲斐ありそう。よしよし」

「遣り甲斐ってなんですか！ちよっと！見ないでやつぱりやめる降ろして」

怒って問い詰めても相手はさつぱり堪えなかつた。機嫌の良さそうな声で呑気に言ってくる。

「なんだっけ。安全の為に必要な心得があつた。動かない喋らないだつたかな。違つただろうか」

じたばたしていたナイチンゲールだつたが、そう言われればぐつと動きを止めるしかなかつた。しかし納得はできず、しかめつ面を床を睨んでぶつぶつ陰鬱な怨嗟を呟く。

「汚れないもの……耳の中とか、だつてどうやって綺麗にすればいいかわからないし気にしたことなかつたしどうしようもないじゃない、だつて見えないんだもの。どうすればよかつたの」

「そんな泣かなくてもいいことじゃないかな、これは泣いてません！」

困惑したように言われ即座に言い返した。イドは相変わらずの呑気な声で、優しげに言つた。

「そうか。見間違えて失礼した。あとこれは別にそんな見苦しい類のものでもないと思う」

「……やつぱり汚れますか。かなり汚いの？もうやだ。死んじやいたい。もういや。いやよ。なによこれ。最低。最悪よ。死にたい、死ぬしかない」

「そんなことで突発的に世を僂まれては私が困るのだが。なんなんだいきなり。日頃はぶつかり合えば鋼の方が曲がる強靱さなの

に……お前の精神的強度の基準がまったくわからない」

「だつてかなり汚いんですよ！そんな駄目じゃないですか！ありえないですよね！もうやだ！」

自分でもかなり半泣きになってると認めざるを得ない感じ
でナイチンゲールが喚くと、イドは困つたようにこちらの頭を撫
でた。言ってくる。

「なにが駄目でありえないのかよくわからないが。別にそんなに
見苦しいものではないつてば。強いて言えば乾いた皮膚というか、
ちよつとした瘡蓋みたいになつてただけというか……取ればわか
ると思うけど。でも中の状態が知りたいんだよね？では、ええと、
たぶん耳垢にも色々個人差があると思うので、あとで資料を用意
する。症例を集めた図録的なものを。その上で、お前のはこんな
感じだつたとあとで教えるので」

「そんなの知りたくない聞きたくない見たくないですわかるで
しょ！！バカ！！死んじやえ！！」

「なぜ親切心をそこまで言われねばならんのか」
痲癩を起こした自分に膝を殴られしこたま罵られ、非常に不
可解な声でイドが呻いている。

しかし、慰めようとはしてくれているのか、また優しい声で、
「あとこれはたぶん……さつきも言いかけたが、例の中耳炎の関
係で余計奥が瘡蓋になつてただけなのでは。ほら、膿が出ただろ。
かなり抜いたけど、あれの残りが多分固まつて……だから怠惰の
結果だとか、見苦しい汚れというのとは違うから気にしなくていい

いんだよ。不可抗力というやつだ」

「膿とか……もういや。死にたい……」

「励ましが届かない」

鬱状態に陥って虚ろに眩くナイチンゲールをものすごく困った感じで見下ろす気配があり、イドはしばらく考えあぐねていたようだったが、やがては困惑しながらも鹿爪らしい声を出した。

そっとまた頭に手が触れる。

「とにかく、お前に死なれては私が困るのだ。勝手にそんな大それた事を口に出すな。僭越だ。あとなにをそんなに口惜しがっているのかわからないが、気にしなくていいとしか言えない。そして私が気にしなくていいと言ったらそういうことだ。違うか？」

「違わない……違わないのですが……私にも譲れないところがあるというか……」

「わかんないなあ譲れないポイント」

心底不可解という声を出すイドの膝の上で、ナイチンゲールは足だけじたばたさせて呪いを唸った。

「イド様は汚れてなかったしわかんないのよお互い様にさえならないじゃない私だけ駄目じゃないでしょうもないじゃないばかばかばか」

「まだ拘っている……」

多分目をつむって口を曲げ、眉を下げて虚空を仰いでいるときの声を出してイドが呻いた。これはかなり困っているときの声だった。

続けて、こほん、と小さな咳払い。

「えーと。とにかく、これから綺麗にするので。安心して欲しい。汚れ……ではなくて、耳垢、いやえーとなんだ、今まで興味なかったから語彙がない、ええと、老廃物。もだめ？では病後の滲出液及び不要となった古い皮膚、また外気の埃などが混合した物質が外耳道に目視できる範囲で存在するので、除去します。特に汚いわけではないが、取り除いた方が聞こえがよくなるだろうという観点から」

死んだ鼠の目でナイチンゲールはぼやいた。

「そういう変な気の遣い方がいいですから……」

イドは溜息をついて、なにやらごそごそ身動きした。次いで無気力になっている自分の耳にそつとアルコール綿が触れ、軽く拭って去っていく。

虚ろに寝転がって、黙ってされるままになっていると、ふとひんやりとしたものが耳を覆った。

それは先程の脱脂綿よりはずつと温かいはずだったが、最初はなぜかそう感じた。しなやかな感触が耳を掴んで、優しく圧をかけてくる。

そのことに気を取られていると、イドがこちらの様子に気付いてぱつと手を離れた。

「あ、爪が痛い？切つてからの方が良かったかな。すまない。すぐ切るよ」

我に返り、ナイチンゲールは慌てて言った。

「あ、いえ、切らなくても。いつも綺麗に整えてらっしゃるのは知っています。痛くないですし」

いつも極力外しながらない黒革の手袋越しではなく、柔らかな素肌の感触に驚いたのだった。爪のことは本当に気にならなかったのだがイドは申し訳なきような声で呟く。

「いや、本当は切るべきだったね。ごめん思い至らなかった。今度からは始める前に切ってくるよ。ごめんね。すこし待ってくれる？」

手を洗う必要があるときなど、ごく稀まれに見る彼女の素手はともも器用そうで、長い指をしていて、きちんと爪も塗ってある。色は必ずほぼ黒に見える暗い赤。

最初は傷でも隠しているのだと思っていたが、どこにもそんなものはなくただひどく女性的な印象の、大きくも綺麗な手だった。指輪はしていない。なぜ隠したがるのかはわからない。まさか潔癖症というやつだろうかと考え、その触れたくないものに己も含まれるのだろうかと思んだこともあるが、そうではないらしい。

「本当に痛くないので……爪はわざわざ短くしないで結構です……そこまでしなくていいですから」

イドは今すぐ爪切りと鑢やすりを取りに行こうかと迷っているような様子だったので、そう付け足す。膝の上に乗っかって良かった。どかなければ重石おもしになれる。

「そうかな。本当は切るべきだと思うが。では、今はせめて、よく注意するよ」

ふう、と己の不注意を恥じる吐息を漏らして、イドはすまなさそうに言った。そっとまた指が耳を摘まむ。

「もし痛ければすぐ言って」

「はい。大丈夫です」

爪が刺さり痛みを覚えることもなく、ただ丁寧に耳を採みほぐされた。ナイチンゲールが一度行った手順を、イドは正確に憶えていた。

採んだり引つ張ったり折り畳んだりされながら、ナイチンゲールはなんとなく呟いた。

「……私もピアスをしてみたいのですが」

「何度目かな。駄目」

渋い声でもなく、やわらかく却下される。静かに聞き返す。

「なぜですか」

「これもまた何度目かの答えだ。勝手に身体に穴を開けることは許可しない」

「自分で開けるんじゃないです。開けてくだされば」

「だから駄目だつてば」

「私もピアスしたい」

「駄目」

「むう……」

すこしだけむくれてナイチンゲールが呻くと、くすりと笑うような吐息を漏らしてちょうどイドの片手が離れるところだった。左手の指だけが残り、右手は道具を持って戻ってくる。そうっと、

固いが冷たくはない感触が耳の上の方に生じた。ナイチンゲールが最初に触つたのと同じ場所だった。

そのまましばらく、すいすいと耳の窪みをなぞられていた。先程見た複雑な造形を思い出す。日頃注視したことはなかったが、改めて見つめれば迷路のような部品^{パーツ}だった。なぜこんな形をしているのだろうか。

ぼんやりと、そんなことを思っていると、

「この時点でなんかかなり気持ちいいよね。あれ、これもしかすると意外といいものなのかもと振り返ればすでに陥落^{かんらく}は始まっていたというか」

イドが楽しげに声をかけてきた。いつものからかうような調子でもなく、今日はひどく穏やかで呑気そうだ。

「……くすぐりたいです。あと、行方側も、あまり喋ると手元が狂うのでは」

そうだ油断してはいけないとナイチンゲールがまたしかめつ面を作り答えると、イドは素直に頷く。

「それはよくない。黙ろう」

言葉通り、黙って耳の迷路を辿って、時々ちよつと匙の先で押したりする。耳にはたくさんのツボがあり、うまく押すと肩凝りが治つたり頭が良くなつたり痩せたりするらしい。眉唾ながらとりあえず勉強したことを実践したのだが、イドは本当に細かいことまでよく憶えていた。

だんだんぼんやりとしてきて、ナイチンゲールも黙りこくつて

いると、やがて軽く耳を引つ張られて耳掻きが耳の中に入ってきた。なんだかものすごくがさが音がある。これはどうなのだろうか普通ののだろうかと考え、そしてだんだん頬の辺りがむずむずしてきてナイチンゲールはそつと囁いた。

「……すこし喋っても？」

「発言を許可する。どうぞ」

頭を揺らさないように慎重に喋れば、自然と先程のイドと似たような調子になった。小声で囁く。

「確かになかなか気持ちいい……です。ただ、中に触ると急にあちこち痒くなつてきて、むずむずするということか」

やたらと大きな音がするのはやはりなにかくつついているのだろうか。耳の壁に溜まるというゴミが。そして憎き中耳炎の残党までも。そういえば匙が皮膚に触れる感触と、そうでない感触があるような気がする。恥ずかしくて死にそうになるが、勝手に死んではいけないのだった。

イドはのんびりと落ち着いた声で、

「手前から順番に綺麗にしていくから、ちよつと我慢してて」

耳掻きをやさしく動かしながら耳の壁の拭き掃除を続けていく。

「あと、もう少し力が強くても大丈夫です……」

ナイチンゲールがそう呟くとイドは、

「そうか。お前はこれくらいそうつとやってくれたので、それを参考にしてた。強い方がいい？」

「えと、痒いので、はい。すこし強めに掻いてもらった方がたぶん……」

ナイチンゲールがそう希望を告げ、主はそれに応じて力加減をやや強める。痒いのが消えてすっきりしていくのは、確かにかなり気持ちいい。

そう考えながら、ふと思いついてナイチンゲールは不安な声を上げた。

「先程は弱過ぎたでしょうか。物足りなかったですか？」

「いや、あんまり優しく丁寧にやってくれるので油断してしまって眠くて眠くて堪らなかつた。とにかく気持ちよかつたよ。ありがとう」

イドからの穏やかだが満足そうな声は、お愛想ではなさそうだった。ほっとして、

「今度させていただく際は……細かくお加減を聞きながら進めます。今日はそこまで思い至らず」

「んー、聞かれても寝てるかも……任せるので、いいようにしてくれれば……」

ナイチンゲールが呟くのを気楽な感じで「蹴してから、イドはなにか見つけたような感じで声を出した。

「あ、ちよつとまた黙ってじつとしてくれるかな」

「はい……」

がさがさばりばり音がして耳からゴミが出て行く。あとで嬉しそうに見せられる前にあの紙を奪って握り潰し屑籠に叩き込まね

ばとナイチンゲールは頭の中で何度も予行演習を繰り返す。

しかし確かに、ぼんやりする。轟音の中で世界が曖昧になりやわらかく蕩けて無意味になっていくのを感じる。これがすなわちイドの覗いていた世界の終端なのだろうか。身体が勝手に柔らかくなつていくのは、肩凝りのツボの効き目なのだろうか。背が伸びたりスタイルが良くなったりするツボはないのだろうか。とくに胸。存在するならば全力で押したい。

ふわふわする頭で、とりとめもなくそんなことを考えていた。基本的にはぼうつとして例の混沌を覗いていたのだが、そのうちにふと、なにか妙な感じがするのに気付いてナイチンゲールはそつと声を上げた。

「あの……ちよつと。そこ、もしかするとなにか触つてはいけなようなところではないでしょうか」

話す前にちよんちよん、とイドの膝をついたので、彼女は手を止めてくれていた。意外そうな声で聞き返される。

「そうかな。普通に見えるけど。痛い？」

「いえ。痛くはないです」

「じゃあちよつと我慢してて……ここにあるやつ、取りたいから」
そう言いながらまたがさがさやり始めるイド。慌ててナイチンゲールは言い募つた。

「いえ、あのですね。痛くはないんですが。あの、なにかちよつと変な感じというか、触つてはいけなような感じが……あ、待つて待つてやつぱりだめ待つて」

「いや別に、他と変わらないよ。すぐ終わるからちよつとだけ我慢してよ」

また手を止めさせられ、困ったようにイドが言うが、どうにも不安が残った。まさかとは思うのだが。

「あの、念の為確認しますがそこは鼓膜より前ですよね」

「当たり前じゃないか。なにを言い出すんだこの子は」

「いえ念の為に……そう……では問題ないのでしょうか……でも……」

呆れ返った調子で言われ恥ずかしくなるが、では脳味噌を穿^ほられているわけではないらしい。ナイチンゲールがぶつぶつ言っていると、イドが不思議そうに尋ねてきた。

「今は痛くないけど、痛くなりそうな感じ？」

なんと説明すればいいのか。戸惑いながらナイチンゲールは答える。

「いえ、痛くはないんです。なんて言えはいいの。え、ええと、ひどくくすぐつたいというか、ちよつと変な感じがしてここ触っちゃだめなんじゃないかって」

「他と一緒に見えるけどなあ」

不思議そうな声でちよんちよんつつかれる。身悶えしてはならないと思うと脚が攣^{つか}りそうになる。

「あ、だからあの、そこ触らないで……く、くすぐつたいの」

「でもここにあるのを取りたいんだよなあ。そうになると、このへん触らないと無理で」

むむ、とイドは考えたが、

「ちよつと我慢しててよ」

あつさり結論を出した。

「はい、そこまで仰るなら我慢しますが……あの、本当にそこは触っちゃいけない部分ではないんですか？」

「たぶん……こちらとしては、なにをそんなに拘^かつてるのかわからないんだけど。どんな感じがするの」

「あの……なんと言えはいいの……ええと、ものすごくくすぐつたいというか、総毛立つというか、フワフワするというか、なにかこう、そこそんなふうに触ってはだめって感じが」

とりあえず思いつくまま、ありのままを説明する。

「あの、耳を触ってるのに連動して足の指がびくつてなるのはおかしいですよ。全く関係ないところなのに。なにか誤作動が起きてますよね。やはりそこは触てはいけないところでは」

そこまで言つて、ふとナイチンゲールは思い至るものがあった。

「……？それとも、先程仰つたなんとか神経が……？反射？してる？でも」

今一つ納得いかず考え込んでみると、イドがああと思ひ出したように呟^{つぶ}くのが聞こえる。

「そういえばお前は咳は出ないな」

「でも足の指がびくつてなるんですけど、やはり変ですよ。さっきから抑えよう抑えようとしているのですがなぜかこう足がむず

むずして変な感じがですね」

すこし考えてイドが言った。

「それって要するにすごく気持ちいいところなんじゃない？」

「いえ、気持ちいいとかそのうち通り越しそうな感じが……」

ナイチンゲールがそう言うと、イドは深く納得して頷いたようだった。こともなく告げてくる。

「ああ、さつきしてもらったときそうだったよ。さんざん通り越したので寝てた」

「え、そ、そうなんですか。それって、それってそんな簡単に通り越していいものなんですか」

「眠くなったら寝ちゃっていいから。さつき私寝てたしね」

「いえ、寝ません、寝ませんから、ちょっと待ってください。ちょっと」

がさがさばりばり。

とにかくナイチンゲールは不機嫌顔を維持しようとして、それだけに集中することにした。なんとか神経のことは忘れる。瘦身のツボ。くすぐったいくすぐったいものすごくくすぐったい。これはやはりいけないことだったのか禁断の業^{わざ}だったのかあの男やはり不良だったのか御母様は正しかった。しかし今自分の脳味噌^{なみそ}をぎりを穿^ほくつてにこにこしているのは誰だ。耳にはゴミが溜ま^たって事実を捻^{ひね}じ曲げる。そこには逆立ちして四本の鼻で歩く変な名前の生き物がある。ナゾベ……ビー……ナゾビーム？あれわかない。どっちだっただろう。くすぐったくて死ぬ。爪。髭^{ひげ}。耳

搔^かき師^しは禿^{はげ}。世界の終端が目の前で口を開けている。

「では、反対。ああ、いいいい立たなくていいから。向きだけ変えて。寝たままでころんと」

色々なものを通り越し、世界の終端に吞^のまれたナイチンゲールの肩を軽く叩いて、イドはそう声をかけてきた。喉から漏れた声は半分眠っていた。

「不躰かと……」

「私もさつきそうだったよ。そう指示されたし、眠かったし、そういうものかと思っただけけど」

「……では。失礼します……」

立ち上がらずに横着^{おんがしやく}して膝の上で反転する。もそもそ頭を動かして具合のいいところを探している間に、イドがさつきと脱脂綿で耳を拭いた。

すこし黙ってこちらを眺めているような気配。やがて、満足げな、自分の仕事を誇るとき^{とき}の声音でイドが呺^はくのが聞こえた。

「小さくて、可愛い耳だ。とても完璧」

とくに何かを考えたわけでもなかったのだが、ぼんやりしていたナイチンゲールは思ったことをそのまま口走^{くそう}った。

「イド様のお耳は……個性的な形をしています」

頭の上の気配は、むっと上機嫌に水をさされたようににわかには曇^{くも}った。苦い声で呺^はいている。

「あれはなんであんな変な形なんだろうね。ドラキュラじゃあるまいしき。いくらなんでも尖りすぎだろう。本当に嫌になるんだけど」

「私は好きですが……綺麗な耳だと思えます。さつきずっと見ていましたのでよく知っています。綺麗です」

「変な形でも」

「変ではないのでは。個性の範疇に収まりませんか？」

イドは深く溜息をついた。

「自分ではどうにも納得できないよ。自分の容姿なんて、なにもかも嫌いだ」

ナイチンゲールは静かに言った。

「私は好きですが……なにもかも綺麗なお姿と思えます」

眠かったので、ぼんやりと喋る。あまりなにも考えていなかった。ただ思うままぼつぼつと口に出した。

「ご自分でなにか……気にされるようなことはなにも。ないのではないかと思えます。周りの者はそう思います。すくなくとも、私は、私の外殻に誓って。あなたは美しいです。とても。誰よりも。いつだって私はそう思います。だから安心して。耳も変わってて素敵だけ。私は大好きです」

ナイチンゲールがぶつぶつ言うのを聞いて、イドはしばらく黙っていたが。

「……先程これは、拷問ではないかと疑ったが」

やがて畏怖を込めた声音で口を開いた。なにに驚いているのか

はよくわからなかった。

「やはりそれに類するものかも……油断させて、口を柔らかくするとか、確かに私もぼけっと蕩けていたとき、大体のことは簡単に答えたり許可を出したりしてしまいいろんな感じがあったし……うまーく誘導されたら秘密の自白とかさせられてしまいうな……」

「……私、今何か変なこと言いましたか？」

「いや、まあ、ありがとう」

「……？」

曖昧に頭の上に疑問符だけ浮かべているナイチンゲールの髪を指で梳いて、イドは穏やかにそう呟いた。

それからしばらく、寝転がったままで素直に世界の終端を覗いていた。そこには相変わらず崩壊の轟音が響き、くすぐったかったが、奥の方まで行かなければまだ余裕はあった。ゆつくりと瞬きを繰り返しながら、ナイチンゲールはふと思いつきをまた口走る。

「耳掃除が……退屈ではなかったかと……仰った件」

眠たげに囁いてから、

「イド様」

「なに」

「すこし喋っても？」

尋ねると相手は笑って応じた。

「どうぞ。許可を出す前にもう喋ってたじゃないか」

「すみませんぼうつとしていました。それで、ええと、退屈ははなかつたんです。全然、退屈じゃなかつた」

ほとんど眠りの中から。うつらうつらと呟く。

「私も楽しんでいました。あなたが気持ちいいって……とつても気持ちいいって褒めてくれたから、嬉しくて。じゃあもつと気持ちよくなつてもらおうとか、絶対痛くしないぞとか、色々考えて、優しく優しく御勤めしようって思つてたら、あつという間でした。だから退屈なんてしなかつたの。本当」

「そう」

「それだけ言いたかつたの」

「そう。わかつたよ」

優しく言われたので、気は済んだ。世界の終端とは、戦おうとするからいけない。もう開き直つて没するのがいい。そうすればなにも心配はいらない。

そう悟り、ナイチンゲールも完全に瞼を閉じた。轟きはいつの間にか遠ざかり、緩やかに眠りの中に沈み込んでいく。

主は掃除を続け、ときどきこちらの髪を梳いたり、頭を撫でたりしながら黙つて微笑んでいるような気配だけがあつた。やがてそれさえも遠くなり、すべては途切れるのではなく緩やかにほどこけて、心地よく消えた。なにも心配はいらなかつた。

「どうだつた？」

「仰る通り……とても……気持ちよかつたです……でも私まだ頭

がフワフワして……ちよつとなにがなんだか……いえ、すつきりしてよく聞こえるようになったのですが、なんと言いますか、あの」

ものすごく期待した顔でイドに聞かれて、ナイチンゲールは混乱気味の感想を述べた。イドはにこにこして満足げに頷く。

「わかるわかる。フワフワするよね。他にない感じのゆるゆるな快楽というかなんというか」

「そ、そんなにゆるくなかつたような……割と激しいというか。あれ、私変なのかしら」

頭を押さえて呻いてから、ナイチンゲールは色々己から手放していたものをしつかり掻き集めようと努力した。油断しすぎた。あまりよく覚えていないが、世界の果てに屈してぐうすか寝ていたのは事実だ。

まずは顔をしかめる。そして、大切なことを思い出しイドの手元から例の紙を掻き攫つて握り潰して屑籠に叩き込んだ。中は見なかつた。イドは悲しそうな顔をしていた。

頭は妙にすつきりとして、確かに耳の聞こえは良かつた。特に左耳がクリアになつた。今までゴミをくつつけて生きていたと思うと恥ずかしくて死にたくなるが、今はもうないのだと思ひ直す。中耳炎とは完全に縁を切つたのだ。しかし憎い病だつた。

使つた道具を脱脂綿で拭き、小箱の中へと戻しているイドを見つめる。なんとなく、呟く。

「……これ、あと三週間はやつちゃダメなんですよね」

「まずい。早くも中毒者の様相を呈し始めている。自制心の未熟な子供には施すべき技術ではなかったか。やはり禁断の行為。阿片の同類項」

はっと目を睜つて、イドが慄くように言う。先程は流したが今度聞き咎め、ナイチンゲールはぐいと主を睨んだ。

「あれこそ、どうなんでしょうか。ご自分で身体に悪いと先程仰いましたが」

視線を尖らせて突き刺す。イドは居心地悪げに顔をしかめて、しかし悪びれない態度で腕組みした。

「ごくごくたまに嗜む程度ならどうということはない。とても暇なときの遊びの範疇。非常に退屈して……つい殺伐としてきたときに、なにか人間的なこともやるかと思つたときのひとつの選択肢。滅多にやらないことだし、嵌つてもいない。きちんとした抑制の管理下でなんとなくちよつとだけ。私は中毒患者ではない。

心配はいらない。ただし子供はやるべきではない」

麻薬は人間的なことだろうか。甚だ疑問だが、突発的に深刻な鬱状態に陥つた彼女がやらかすことに比べればまだおとなしい範疇か。

「大人もやるべきではないのでは。いえ別に身体の心配などしていませんが、あなたの頭が麻薬に侵されこれ以上深刻におかしくなると嫌なだけです」

賭博は可。ただしイカサマ不可。煙草は断固不可。飲酒はほどほどならば可。麻薬は中毒にならなければ可。だが未成年がやる

のは不可。倫理観が身勝手かつややこしくついでいけない。他にもあれこれの細かい不可の区分についてナイチンゲールがざつと頭の中に並べていると、

「だからそんなにやつてない……うむ、後始末はちゃんとしていたつもりだったのに油断したそういうときに限つて見つかるというか、まあそれは当たり前かなにもなければ見つからないもんな、まあそうだな」

イドは不都合そうな顔のまま、なにかごちゃごちゃ言つてひとりで納得しているが、気に入らない点があった。むつとしてナイチンゲールは言い返す。

「私はただ見慣れないものがあるなあと思つたので手に取つただけです。綺麗な香炉だったからちよつとよく見てみたかっただけで」

「人の部屋に侵入して。あまつさえ見慣れないものがあると言われてもそんなに平時を熟知している程の常習犯なのかしら」

「珍しくドアが鍵もなしに半開きだったからです！ 普段は入らない！ ちよつと覗いたら見えたの！ それだって、ちゃんと片付けてるのか気になったから覗いただけ！ 散らかつてた！ なによ自分がボケてたくせに全然管理なんかできてないじゃないどうせまだ半分夢心地でぼけつとして出て行つたんでしょ自分が悪いんじゃない！ 私は普段勝手に部屋に入つたりしてません！ なによ自分がこつそり悪いことしたのに人のせいみたいに言わないで！ そんなのおかしいじゃないですか！ 馬鹿みたい！ 馬鹿よ！ 馬鹿よ！」

じろつと白い目で見られて不満げに言われたのでナイチンゲールは痲癩を起こして喚き散らした。自分の声がきんきん耳に響く。相手もうるさいと思つたのだから、眉間を押さえて唸つてゐる。

「匂いは始末したのになぜ香炉だけ片付けなかつたのかは自分で……あと確かにドアの件、うん、まあ、そういうこともあるよね。あと適当に誤魔化せば良かったのに用途について説明してしまつたことについても、まあ、うん、そうだな。ここまで重なる」と多少ボケてたかもしれない。認めざるを得ない。ううむ、十分に醒めてから行動したつもりだつたのだが全然駄目じゃないかおかしいな」

「もうやめなさい。身体に悪いから」

思わず突つ込むと、イドはすかさず嬉しそうな顔をしてこちらを指差した。

「あ、身体の心配してくれてる」

「言葉の綾あやです！」

ナイチンゲールがぶん投げたクッションをまともに食らつて椅子の上に横ざまに倒れてから、イドはよろよろ起き上がつて言った。

「ま、まあ、その件はその件だ。とにかく中毒はよくないよねつて話。いやそんな話だつたかな。違つたような気も。まあいいや。とにかく、間違いが起きぬよう道具はきちんと片付けておこう。責任持つてこちらで管理します」

サイドテーブルに置いてあつた箱を持つて、いつの間にかまた手袋を嵌めていた手で撫でている。それを眺めつつナイチンゲールはぼそりと呟く。

「……二週間」

「まあ、我慢するのつて楽しいよね。私は凄く好きさ。何事も我慢があるからこそ良いのではないだろうか。我慢があるから報われる。安心の構図。わかりやすい。そしてまたその上で、ああも何もかもどうでもいいやつて本当に吹っ切れたときのあの崩壊もさ、そういう秩序があつたからこそより素晴らしく感じるとうか。だつてもうないんだよ。なにもないのつてびっくりだよ。いやまつたく安寧あんねいとは……ああ、意味わかんないかな。ごめんね」

「いえ」

イドはにこにここと上機嫌でよくわからないことを言つていたが、こちらが眉根を寄せて困惑しているのを見てか比較的早目に話を打ち切つてくれた。いつもこうならいいのだが。

ナイチンゲールはすこし考えて、

「あなたの部屋はごちゃごちゃなので……道具は私が責任持つて預かるといふのはどうでしょうか」

提案してみたが、イドは笑つてかぶりを振つた。

「駄目駄目。こう見えて必要なものはなくさないし、壊さないよ。心配しないで。そもそもあれはあれで私にはちゃんとわかるように最適化されているのだ。ともすれば乱雑に見えるのかもしれないが……」

「誰がどう見ても乱雑よ」

不機嫌に言い返し、しかし企みは失敗したと考え、悩んだ末に、
「……思うのですが、三週間というのは大事を取り過ぎでは。本
当はもうすこし短くても安全なのではないでしょうか。そんな気
が」

「完璧に近い勉強をしたお前が、三週間から一ヶ月に一度と教え
てくれたのだが。まあ程良いんじゃない、色々」

ナイチンゲールは食い下がった。

「お手間は取らせません。自分でやるのも駄目ですか？」

「要求が直球になってきた。それについては、危ないから先程禁
止したよ。あと中耳炎が怖いので、やりすぎは駄目だと自分で言っ
ていたじゃないか」

「そうでした……でも、三週間……」

遠い。果てしなく遠い。明後日ぐらいにまたやったら駄目だろ
うか。

そんなことにかなり真剣に悩んでいるこちらを眺め、イドは
ふっと屈託のない笑顔を見せた。穏やかに言う。

「三週間たったらまた私に耳掃除をして頂戴。そしたら、お返し
に私がまたお前の耳をやろう。それまでによく勉強しておくから
期待していて」

目を閉じて、箱を優しく撫でる。自信を持った口ぶりだ。

「道具もずいぶんいっぱいあるが……匙と、水鳥の羽と、ふたつ
しか使っていない。この辺りも用途などよく調べておくよ。まか

せて」

そうして、第一回目の未知への探索は幕を閉じた。

結局のところ。

井戸の底で当初物議を醸したこの行為は、イドによつて『世界
の終端見学ツアー』というあだ名を貰い、その後定着することに
なった。

三週間に一度のお楽しみ。イドは用途不明だった残りの道具
についても、宣言通り完璧に使いこなせるようになって第二回ツ
アーに参加した。ナイチンゲールは相変わらず、細い木の匙と水
鳥の羽しか使えず、奇を衒ったこともできなかったがイドはたい
へん満足してまた呑気な顔をして膝の上で寝ていた。

そのあとナイチンゲールはいええ、やる気満々のイドに、
色々な形の匙だとか、ピンセットだとか、糸より細い針金だとか、
耳のツボを押す為の棒だとか、遂には音叉まで出てくる騒ぎでど
にかく色々あるだけ使われて、耳とはなんだっただろうかとゲ
シュタルト崩壊を起こすくらい徹底的にもてなされた。途中でど
んどん何が何だかわからなくなってきたので、もうひたすらイド
の膝の上でぼんやりと世界の終端を覗いていた。足元には注意と
言われていたが、身体中ふにやふにやなのでこれはやはりとても
危ないことなのだ確信した。

世界の終端は、手強い。

全工程の終了後、ナイチンゲールは自分の腕前とイドの腕前が明らかに釣り合わないことに対して提言し、自分の技術では主を満足させられないことを苦渋の決断で認めた。かくなる上は、皇帝の耳掻き師まで存在する、御伽の国支那^{おとぎのくにしな}に向向けばたくさんの素晴らしい技術者がいるはずであり、必ずや満足のいく施術を受けることができるはずだと提案したが、イドはそれをやわらかく一蹴した。

自分はナイチンゲールの行うどこまでも優しい耳掃除が好きなのであって、他の凝った快楽には興味がない。また、他人に耳の中をいじらせる気はないし、髭^{ひげ}の中年男性の膝枕など断固嫌だと主は言い切った。

だから、ツアーが第何回目になつたとしても、イドはまず左耳を上にして嬉しげに彼女の膝に寝るし、ナイチンゲールもその耳たぶから大切にピアスを抜き取って、サイドテーブルに置く。

イドは必ず爪を短く切ってくる。切らなくてもいいと何度も言つたが、女の子の身体を爪の伸びた手で弄^{もよほ}るような輩^{やから}は即座に死ぬべきだ、またその際は可能な限り見苦しくない方法を選び自らそつと世界から消え去るべきだ、自分はそんな害虫以下の存在には断じてなりたくないと頑^{かたく}なに主張され、そういうものなのかと思つたので好みにさせることにした。もちろんナイチンゲールも事前^{のぞ}にできるだけ短く切つて、鑷^{やすり}をかけてから臨^{のぞ}むことになっている。深爪^{かみづめ}には注意だ。

それから無駄なことをしばらく喋ったり、やがて黙ったり眠ったり交代したり、そんなゆるやかな時間を過ごせるのが、井戸の底の秘密の『世界の終端見学ツアー』なのである。